
君の物語

ササキヤス

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の物語

【Nコード】

N2770BA

【作者名】

ササキヤス

【あらすじ】

毎晩のように見る悪夢、それはひたすらに深い闇を落ち続ける夢。しかし今夜は違う？異世界に墜落した、記憶を見てしまう病にかかった少年^{いすみ}泉がそこで出会ったのは優しい魔女と火の精霊、そして何度も死んだ少女。泉は何を思い、どう生きていくのか。その旅はきつと君を知るための物語。ちよつと変わった世界から召喚された少年が召喚された先の世界で、いろんな人と出会い別れ成長していく物語です。

夢から夢へ（前書き）

初作品です。よろしくお願いします。 1月9日、ご指摘を踏まえ
魔改造してみました。追記 やつと自分のしていた最大の失敗に気
がつく。蝶恥ずかしい・・・。

夢から夢へ

「それじゃ、戸締りしとくんだよ」

「……ん。で、今度はいつ帰ってくるんだよ」

「さあね、一体いつになるのやら。　そろそろ泉も親離れた方がいいんじゃないの？」

「……っ！誰が親だ誰が！さっさと出て行け帰ってくるな！　後死ね！」

「ハハハ、酷いなあ、もう。じゃ、いつてきます」

ガチャン、と大きな音を立てて閉まる鉄のドア。

「……いつてらしゃい、トウノ」

この重いドアの向こうにいる男にはきつと何も届かないことだろう。俺は鍵を閉め、チェーンをかけ、居間に駆け込む。

何が親離れだ！

あのニヤけた顔を思い出すと無性に腹が立って、俺は手近にあるクッションを取り敢えず力任せに思いっきり殴った。
有名キャラクターの顔を形どったカラフルなクッションは無残に凹んでしまう。

「不細工だなー、お前。トウノにそっくりだ」

そう独りごちて一人には広すぎる居間を眺め回す。テーブルの上にはたくさんのメモが散らばっている。

『6月24日 トウノ、出張』 『トウノとは泉の養育者のこと』 『夜は早く寝ること』 『お風呂は長くて一時間、水分をしつかり取るように』

『クーラーの修理業者はトウノがいるときに呼ぶこと』 『忘れちゃいけないからメモは剥がさないで置くこと』

俺が忘れてしまわないために、トウノが毎回出かける前に書いていくメモ。俺にとってはとても大切な紙切れ。

時刻は午前10時。憎いくらい夏の空は晴れ渡っていて、最近危うげに稼働しているクーラーを俺は睨みつけた。

滅多に外に出ないから俺の肌は真っ白。灼熱の太陽がどれだけ猛威を奮ってしようと俺には関係ない。

俺はいつも通りの日課を繰り返すだけなんだから。

10年モノの学習机は居間にある。トウノ曰く、いつでも顔を見られるようにするため。

もつともらしい理由をつけるのがあいつは本当に上手い。滅多に家にいることなんて無いくせに。

俺はそれに向かい合うと、棚から数学の参考書を引っ張り出した。

微積分やら数列やら小難しいことがたくさん書いてある。

世間一般の高校生はこんなことを毎日やっているらしい。

この糞熱い中、仲良く寄り添ってご苦労様だなあ。

決して妬みでも嫉みでもなんでもない、そう自分に言い聞かすように俺は雑紙に計算を書き殴った。

ピピッ、ピピッ、ピピッ

時計がやかましく鳴っている。

これはお昼ごはんの時間を知らせる合図。

「……別にお腹空いてないし良いよね」

煩い保護者は今日はいないのだ。俺は眼の前の作業に没頭する。

今やってるのはグラフに書いたレモンの面積の求め方。

いや、もちろんレモンなんかじゃないのは解っているけれど、どうせ無駄な知識だ。

どんな覚え方したって人に話すことなんて無いんだから。

丸くなって使い物にならなくなった鉛筆をゴリゴリと削り、俺は再びノートと向かい合う。

ひたすら式を書いて、図を書いて、解いて、解答を確認する

……それを延々と、昨日と、一昨日と、一週間前、ひと月前、一年前と同じように繰り返す。

ピピッ、ピピッ、ピピッ

時計がまたやかましく鳴っている。

確か昼ごはんは今日はやめたんだった。だからこれは晩ご飯の合図。

6時間以上もやっていたのか。

我ながら自分の集中力に感心する。

そういえば、いつの間にかレモンの面積は卒業して今は池の面積を求めている。

酷使し続けた眼をぐつと押さえ、首を鳴らす。

流石にお腹空いたな。ごはん、食べよ。

台所は居間と隣接した対面式だ。ほとんど一人でしかないこの家には過ぎたもの。

今日の晩ご飯は大量に余ってる大豆で出来た栄養機能食品だ。トウノがいたらやれ味噌汁作れたの、コロッケ食べたいだの煩いけど、俺一人ならこんなので充分。

もそもそして喉に詰まりそうなそれを牛乳で一気に流しこむ。

お気に入りのフレーバーはトマト。本当はトマトは大嫌いだけど、これはトマトの味がしないので中々に征服感があって良い。

物足りないのもう一本袋を開け咀嚼し始める。今度はブルーベリー味にする。

音が無いのも何なので、テレビを点けると毎日やっている国营放送の『病気との付き合い方』という番組がやっていた。

白衣のおばさんがにこやかに視聴者に話しかけている。

「 氣の方が心細いということは注意しなければなりません。病状は人により様々とは言え、孤独感は病状を悪化させる原因にもなり得えます。

ですから、みなさん、なるべく傍にいて安心させるようにし

ブチッ。

乱暴に電源をコンセントごと落とす。

何もこいつら解ってないくせに。誰も救っていないのに偉そうに。

気分が酷く悪い。空腹に突然飲んだり食べたりしたからなのか胃もキューキュー音を立てている。

どうしよう、お風呂にもう入っちゃおうか。

まだ湯を張ってはいないけれど、入りながらも出来るだろうし。それに、今はすぐにでも狭い浴室に籠もりたい気分だ。

「よし、入ろうと決めたら入る、それが大事」

誰かに言い訳するように大きな声で言つて、半分ほど食べて飽きた栄養機能食品をそのままに俺は浴室に小走りで向かった。

風呂から上がると時刻は9時を指していた。二時間ほど入っていたらしい。

冷蔵庫を開け、キンと冷えた麦茶をコップに注いで飲む。喉が痛くなるほど冷たいそれは火照った身体には丁度いい。

これからどうしようか。

今日はもう日課もしっかりこなしたし、持っているゲームも大体クリアしてしまっている。

どうせ起きていたってすることもない。もう寝ちゃおうか。

そう考えながら、俺は空になったコップに麦茶をもう一度注いで一息に飲み干す。

早寝早起きは三文の得だつて言っし、寝よう。

俺は善は急げとばかりに駆け足で洗面所に向かい、身支度を整える。病院には行けないから、歯磨きは念入りに。特に歯医者はベタベタ触られるから、記憶を見てしまう可能性が高いのだ。

トウノの趣味で10種類も備えてある歯磨き粉の中から一番高そうなのを選んで俺は歯を磨き始めた。

ゴリゴリと乱暴に擦りながら考える。

何か忘れていないだろうか。ごはんは食べたしお風呂も入った。うん、トウノのことも覚えている。日課の勉強もオーケー。あとは

……

「あ」

ぼろり、と俺は歯ブラシを落としてしまった。ポタポタとだらしく垂れる白く濁った唾液。

慌ててティッシュで拭き取りうがいをする。

寝たら変な夢を見るのをすっかり忘れてた！

そうなのだ。最近俺は変な夢を毎日見続けている。そのせいで中々眠れない日が続いていることもすっかり忘れてしまっていた。

トウノに相談しようと思っていたのに！

昔、原因はわからないけれど寝られない日が続いたときに、トウノは知り合いの医者から睡眠薬を貰ってきてくれたことがあった。

それがあれば何となくだけれどぐっすり寝られるような確信が俺にはある。

しかしトウノはもう何処かへ出かけてしまっている。早くても3日、下手すればひと月以上も帰ってこないようなヤツだ。

「諦めるしか、ないか」

起きていてもつまらないのに寝ても辛いっていうのは結構堪えるものがある。

少しだけ期待してベッドの横の携帯を見てもメールも着信もない。薄情なやつめ、そう毒づいても帰ってくるわけでもない。それにアイツに頼るのはなんか癪だ。

頼らないで済むならそっちの方が遥かに良いのだ。

「覚悟決めて寝よー……」

滑りこむようにベッドに潜り込む。

連日の睡眠不足のツケ精算が来たようで、先ほどまでの不安が嘘のように、俺は考え事をする間も無く眠りの世界に落ちていった。

「うわあああああああああああああす！！！！」

お、お、落ちる！落ちる！落ちるって！！

何も見えない闇のなか、俺は必死に手を伸ばす。

その手が虚しく空を切ることがわかっていても、何度も、何度も、何度も。

知っている、これは夢だと。毎日のように続く、つまらない夢。

だけれどその余りに深い闇は幾度見ようと、怖くて、寂しくて、誰か助けて欲しくて。

だからこうやって無様にも必死で俺は手を伸ばし続けている。

そして、今日もまた誰もその手を掴んでくれずに、夢はそこで途切れてしまうのだ。

俺は布団を蹴飛ばしながら飛び起きた。枕元に置いてある携帯は規則的に点滅している。

「うう、眩しい……」

液晶板には不在着信3件の表示。時刻は午前3時26分。まだ真夜中だ。

いない誰かに聞こえるように大きな溜息を洩らし、汗でぐしゃぐしゃになった寝間着を取り替えるためベッドから降りた。

どうにも変な寝相でもしていたのか身体中が軋んでいる。以前に映画で見た油の切れたロボットみたいだ。

「^{イヌミ}泉、クマひどいぞ」

昨日の朝そう言って人のほつぺたつつきまくってたのは誰だったか。最近めつきり老け込んだ長身の男を思い出して、目覚めてから二度目の溜息をつく。

多分今日も言われるんだろうなあ、と俺は洗面所の鏡を見てまた深く溜息をついた。

ああそうか。今日からあいつはいないんだっけか。

そんな大切なことを忘れているほど今の俺は疲れきっているようだ。洗いたての寝間着は洗剤のいい香りがして少しだけ落ち着く。

「寝たい……」

しかし、どうせ寝たって同じ夢を繰り返すだけ。

そんなこと思いながら、俺は重たい足取りで寝室へ向かう。フローリング張りの廊下は素足には結構冷たい。

眼が完全に冴えてしまわないよう気をつけて、その冷たさを意識しないように俺はのそのそ歩いてゆく。

今度こそ、見ないぞ。

全く根拠のない誓い。

いや、もう見てたまるものか。一体俺が何をしたってんだ、悪夢を見るような悪いことはしてないぞ。

誰に向けていいか解らない怒りを吹き飛ばすようにベッドに飛び込む。

今度こそぐっすり眠れるように固く瞼のシャッターを降ろす。

汗でぐっしょり濡れたシーツは気持ち悪い。

湿り気の強いところから逃れるために寝返りを打った。

そういや、寝不足は人の心を弱くするって、好きなRPGのキアラが確か言っていたつけ。

どうせ見るならゲームの世界みたいな夢溢れる世界がいいなあ、

なんて、自分の馬鹿らしさにまた溜息をつく。

おまけのように欠伸もついてきて、今度もすぐ眠れそうだと俺は思った。

ゆっくりと、着実に俺は眠りの海の波に流されてゆく。

寄せては返す、気怠い波の向こうに見飽きた家族の影を見たような気がした。

いつの間にか俺はまた寝ていたらしい。

そしてさっきの誓いも何のその。俺は結局また落ちている。

一体どこまで俺は落ち続けるのか。
一体いつまで俺は落ち続けるのか。

だんだんと夢の中で意識だけが覚醒してゆく。
そして、落ちる恐怖にいつもどおり取り乱し始める頃合いに、それは起こった。

眩い光が視界に広がる。俺は思わず眼を細めた。
暗闇の中には気がつけば月が1つ、2つ、3つ。ぼう、と浮かんでいる。

夢の世界は月が3つの世界。よくできたファンタジーじゃないか。

案外馬鹿な考えも悪いもんじゃないな。夢に常識なんて必要ない。
しかも何か見えるならいつもより格段にいい夢だ。

こんな夢なら、起きているよりもずっと素晴らしいかも知れない。

次第に世界がはっきりと姿を現す。

正面に広がるのは雲ひとつ無い夜空と、それを飾るたくさんの星。
そして相変わらずの3つの月。

ああ、そうか俺は、仰向けに落ちているのか。

頬が冷たくなってきた。

風で寝間着が生き物のように呼吸を繰り返す。

「きれいな空だあ」

大きな声で言ってみる。声は深い夜の黒の中に吸い込まれてゆく。

東京の空は星が見えない、なんて歌詞によくあるけれど、ここ

の空はとても綺麗だ。

誰にも手の付けられていない影の海。宝石をどれだけ零せば、こんなにも美しく輝くのだろう。

不意に身体に震えが走る。風の波に流され続け、爪の先から頭の頂上まで冷え切っている。

現実の俺は、ふとんを蹴飛ばして寝ているのか。

それとも寝ぼけて素っ裸にでもなっているのか。俺は……

「な、ななななんだこいつは！！！！何処から落ちてきたんだ！！！！」

突然の声の方向を見やると、俺と並走するように落ちている少女がいた。

「おお、ついにこの夢に登場人物が……。感無量だ、アハハハハ……」

俺は身体を突き抜ける風の冷たさに身震いをしながら、しっかりと眼を開け少女を見る。

口を半開きにして、驚いているのかちょっと間抜けな顔でこっちを見ている第一登場人物。

金髪、赤目。魔女っぽい三角帽子に黒の外套。

うーん、どう見ても魔女。魔女っ娘。いったいどこのファンタジーだこいつは。

魔女はブツブツと呟きながら、俺の隣から上空に移動をした。

こいつは落ちているんじゃない、自分の意思で飛んでいるんだ。
すごいなあ、さすが魔女だ。

ぼんやりと俺は彼女を眺めた。風で膨れ上がっているスカートを手で抑えながら彼女は俺を訝しげに見ている。

「……むう。魔力にあてられているのか。どうにも変だのう。どれ、
対象 魔力 放出」

少女が俺に指を指す。

え？今のは、呪文ってやつか？

少女の言葉により一気に思考がクリアになる。

俺は改めて少女を見て、念のために空を見て、肌に感じる風をしっかりと確認してまず深呼吸を試してみる。

すう、はあ。

冷たい風が喉に痛い。

しかし『だのう』ってなんだ『だのう』って。流行りのロリババアってヤツかこいつ。

よし、もう一度現状を確認しよう。いや確認するまでもない。オーケー落ち着くんだ泉。

俺がしなければならぬ行動はもう決まりきっているじゃないか。

「た、たたたたたたた助けてくだひゃい……」
「！？」

俺は目の前の老婆系少女に土下座する勢いで頼み込んだ。
恥も外聞もない。というかそんなこと頭の片隅にすらない。

「というかどうなってるんだ、夢が夢じゃなくて、現実で夢で？
あー、もうわけがわからん！」

必死に頭を動かして考える。しかし、何がなにやらさっぱり解らない。

混乱する俺を嘲笑うかのように、空中で土下座をしようとした報いは間髪入れずに訪れた。

地面に平行に落ちていた身体の重心が少しそれると手が、足が、何かを求めるかのようにチグハグに暴れ出す。

「ひっひぎゃああああ！おち、おち、おち、おちおちおち」

「さっきから落ちているではないか……」

「落ちるー！！」

先ほどまで少しは俺を支えていた風は反旗を翻し、俺の身体を揉みくちやに揺らす。

少女は聞こえよがしに大きな溜息をついている。そんな暇があるなら早く助けて欲しいが上手く口が動かない。

「はああああ……。未熟な魔術師かなんなのか知らんが情けないことだ。」

貴様も魔道の端くれにあるものならシャキッとせんかシャキッと！」

浮遊しながら腰に手を当てて説教を始める少女。

「い、いいから早く助けて！！死ぬ！死ぬって！！」

落下しながら操り人形のようにもて遊ばれ、絶叫する俺。

「ああもう鬱陶しい。他人に飛翔術をかけるなどしたことないわ！まあ良い、ちょっと荒っぽいかなんとかなるだろ。

人は、地に足をつけるものなるべし」

少女の言葉が発された瞬間、俺の落下速度は先程の比ではなくなった。

「うわあああ！！は、早くなってる！！早くなってるって！！！！」
「ふん、この私にかかれば言語魔術程度でもこの効き目。ああ、自分の才能が恐ろしい……」

「うわあああああ、トマト祭りのトマトにはなりたくない！どうせ死ぬなら綺麗に死にたいいいいい！！！」

「えええい！！ウルサイ！！少しは落ち着かんか！！　　されど、大地は、人の仔を祝福するもの。故に大地は仔らを許し、全てを受け止める！！！！」

暴れまわっているうちに俺は大地を見ていた。
下の世界はどこまでも続く広い原っぱ。どんどんそれに近づいてゆく。

ああ、父ちゃん、母ちゃん、ご先祖様、今、泉はそちらに向かいます。トウノ、冷凍庫にカレー入ってるから溶かして食っとけ。

やっぱり潰れたら痛いのかなあなんて思いつつ、俺は衝撃に身を備える。

もう、駄目だ。こんなことになるならもっと人生楽しんどきやよかった！畜生トウノ、小遣い増やせ馬鹿鹿野郎！

不意に世界が急転する。

「え？」

ふわりと、それが当たり前のことであるかのように俺は先ほどまで見下ろしていた原っぱの上に立っていた。
ススキみたいな植物が生き物のように体を櫛っている。

ここが、天国？地獄？それともヴァルハラ？

なんて考えているうちにまた世界は黒く染まり始める。
この感覚を俺は知っている。貧血のときと同じものだ。

「ククク……、フッフッフ、ブフォツ！ んっんー、……ハアーハッハッハー！ 適当にでっ上げた言語魔術が成功するとはやはりこの私、稀代の魔女エルルカ・フィンは大天才！！
……しっかし私が大天才だというのを抜きにしてもこいつ魔力抵抗も糞もないではないか。一体何だというのだコイツは」

薄れていく意識の中、あの少女のようなババアのような子の悪役臭い三段笑いが聞こえていた。

随分と懐かしい夢を見ている。

ドタドタと狭いリビングに雪崩込む3人の男たち。

俺は呆然とそいつらを眺めている。背中に感じるのは誰の温もりだったのだろうか。

「な、誰だ！」

大きな声を上げるこの人は確か俺の父親だったはずだ。

全然似てないなあ俺と。メガネなんかかけてお堅そうだし。

「^{アザミ}薊イイ、会いたかったぞお」

ダミ声の男は親しそうに俺の父親に話しかける。まるで、本当に大切な友人に話しかけるように。

そして懐から何かを引っ張りだすと、流れるような動きでそれを狼狽える父さんの首に向かって素早く差し出した。

「ガッ、あ、ひ」

獣じみたお父さんの叫びの後、真つ赤な噴水があがった。

男の右手には血で汚れたナイフ。華美な装飾の高級品。仕事道具なんだ、と自慢気に昔俺に見せてくれたもの。

このおじさんとは俺は会ったことがあるはずだ。確か俺がまだ小さい時、トウノがいない間面倒を見てくれたことがあったつけ。名前は、なんだったかな。そっぴや正月にやってきてお年玉置いてったこともあったけれど。

男のニヤけた顔は、赤い血でぬらぬらと染まっている。それでも笑うのを決して止めない。

お父さんは必死で、首を押さえる。だけれど、流れ出るそれを止め

るにはその両の手じゃ全く足りない。

ヒュー、ヒュー、とすきま風のような音。床に広がる真っ赤な水たまり。

鮮やかなそれとは対照的に、青くなってゆく、俺の父親の瘦けた頬。

「あ、あ」

俺は間抜けな声をあげてその光景を眺めていた。

確か、このときは何かなにやらさっぱり意味が解らなかったんだ。

後は、そう俺を抱きしめる力がとても強くて、痛くて苦しかった。

俺を抱きしめている腕がカタカタと震えている。

無理もない。怪しいおっさん三人組がやってきたと思ったらいきなり目の前でスプラッターだ。

怖くないはずがない。……あれ？　なら、どうして、俺は怖くないんだろう？

ぶくぶくと太った男、豚の蚊取り線香に似ているそいつが好色そうな笑みを浮かべ俺に近づいてくる。

いや、俺に近づいているんじゃないか。俺を抱きしめている人近づいているんだ。

俺は窺うように上を見上げた。日本人形めいたその顔は、恐怖のためか青白い。

恐らくこの人が俺の母親なのだろう。

「花珠、^{カシユ}ずいぶんと久しぶりだなあ」

男がそう俺の母親に声をかけた。

ブッン。

か弱い糸が途切れるような、そんな間抜けな音がして世界はまた真っ暗になる。

そこで俺の夢は、途切れた。

ああ、そうか。ここから先の記憶は俺には無いんだ。

真っ暗な世界に浮かびながら考える。

そういえば、アイツ、あそこにいたんだっけ。

さっきの夢は、俺と両親の別れの記憶でもあり、トウノとの出会いの記憶でもあった。

俺は必死に先ほどまで見ていた夢を思い出そうとする。

積み木の中から、必要な1つを探すように。完成形に必要な、ぴったりのモノを探すように。

ああ、あった。アイツは、泣きそうな顔で俺を、

「目覚めよ。門には鍵がかけられ、何人もそれを通るに能わず」

不意に、幼い少女の声が独りだけの暗い世界に染み渡るように広がった。

色の潮流が俺を飲み込み、ぐるぐると洗濯機の中の服のように俺は雑に回される。

そして、外の世界に俺は引っ張り出され、今度こそ悪い夢はそこで

途切れた。

「ほれ、さつさと起きんか！！朝よ！イズミくん！起きて！」

俺にそんなベタな幼なじみなんていないぞ。

う、眩しいなあ。カーテンしてるのに何でこんなに眩しいんだ？

「あー、最悪の目覚めだ」

トウノを思い出しながら目覚めるといのは腹が立つ。

俺は昼間のような眩しさに苛立ちながら身体を起こす。節々が筋肉痛のように痛んでいる。

「で、トウノとかいう男がお前の親代わりだったのか？」

「あいつが親？そんな訳あるか。出かけてはひと月ぶらぶら帰らないで偶に帰ってきてても家事も何もしない、本当の役立たず。」

……まあ、金とかは出してくれてるからそこそこ感謝はしているけど」

「……そうか」

ん？俺今誰と話してるんだ。というかさつきからずっと誰かが話していたような……。

謎の声の方を向くと偉そうにふんぞり返って座っている先ほどの夢の魔女っ娘がいて、眉間にシワを寄せながら俺を見ている。

「ああああー！！！！夢で俺を助けてくれたロリババア！！」

俺は驚いて叫んだ。

なんで夢の住人がリアルにまでいるんだ。それともまだ夢の中
とでも言うのだろうか。

それにしてもさっきの夢は酷かったな……。……。ん、さっきの夢って
そっか。さっきのさっきの夢か。

さっきの夢はトウノと出会った日の思い出、さっきのさっきは月が
3つで、空から落ちて……。。

うーん、これだけ鮮明に夢を覚えてるのも珍しいなあ、ってあれ？

目の前にはさっきより深く額に青筋立ててこちらを睨んでいる夢の
登場人物A。

「ほう、最強魔女エルルカ様を捕まえて今なんと言った貴様」

随分ご立腹なようだが見た目がハロウィンの仮装で本格的なコスプ
レをしている白人美少女なので全く怖くない。

おまけに先ほどから動く度に三角帽子のツバに乗った鈴がチリ
ン、と可愛い音を立てているのが微笑ましい。

「どうでもいいけど部屋の中で帽子被ってたら禿げるぞ、ロリババ
ア。で、なんで人ん家にいるんだよ。

いくら無法地帯の夢の中でも、勝手に人の家入ったら不法侵入だ
ぞ不法侵入。あ、無法地帯なのに不法侵入って矛盾してるな、アハ
ハハ」

暢気に話しかけると少女は俯いてプルプルと震えている。鈴がそれ
に合わせ音を鳴らす。

うーん、ちょっとババアは言いすぎだったかな？

夢の中ではあるが女の子を泣かすのはどうにもいい気持ちはしない。さて、どうやったら笑ってくれるのか考えていると急に少女は勢いよく顔を上げて俺を睨んだ。

おお、完璧に怒っていらっしやる。

しかし美少女は怒っていても様になるなあ。美しいということはそれだけで特権階級だな。うん。

「だ」

がたん、と椅子から立ち上がると、その少女の仮面を被った鬼はゆつくりと近づいてくる。

小さいのに凄まじい迫力だ。急に全身に寒気が走る。少女は背中にその姿形に見合わない巨大な影を背負っている。

「れ」

その赤の瞳に射すくめられ俺は固まった。

そういやこの部屋俺の部屋じゃないなー、ベッドもやたらでかいし。

少女の迫力に押され、どんどん頭の中が整頓されてゆく。しかし、どうやらもう遅かったようだ。

「が」

ピッチャー振りかぶって第一球。

ということはさっきのアレは現実なのか？今俺は月が3つのバリバリファンタジー世界にいるのか？じゃあこいつも本当に魔女？

「ババアじゃ！糞ガキが！！！！ 起動！」

「ぐはあっ！」

ドゴオっと音がして鳩尾に綺麗にめりこむロリババア（仮）の拳骨。

ぐっ、今のは効いたぜ……。

今日は良く眠れる日だ、なんて思いながら俺は再び意識を手放すのであった。

……今度は悪い夢を見ないように祈りながら。

夢から夢へ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔（前書き）

1月11日 改訂

魔女と使い魔

「連絡ご苦労。さつさと主の元へ帰れ。真夜中にレディの家に長居するでない」

明け方の空へ一羽のガラスが飛び立ってゆく。ようやく白んできた空は雲一つない。今日は快晴になることだろう。

石作りの重厚な部屋で彼女、エルルカ・フィンは苛立ちをその小さな身体一杯で表現していた。

幾度も足を組み換え、舌打ちをならし、手元のキセルを思いっきり吸いては白煙を吐き、陶器のコップの中の酒を一息に呷る。

ちなみにこの酒は赤の国特産の『辛い実』の酒。度数は80%を超える。子供のような見た目の彼女にはおよそ似つかわしくない飲み物だ。

目の前にはすやすやと暢気に眠る先ほど墜落していた少年。

なかなか今回の魔術具は良いできなんじゃないか？一発殴れば即KO、なんて触れ込みをしたら売れ行きもよさそうだ。さすが私は大天才

そう思いながらも首を横に振る。今それを考えるのは誇り高き彼女にとってには逃げることに同義だった。

決して向かい合ったものからは逃げないこと、それは自らの弟子にも伝えた彼女の信条でもある。

その信条のなかには、『儲けられそうな機は決して見逃さぬこと』も入っているのだが。

記憶は一部を除いて断片的。しかもその一部も随分と血生臭い

ものときている。さて、関わってしまったからにはどうにかしてやりたいが。

最初は飛翔魔術の失敗かと思っていたがどうにも事情は複雑なようであった。

彼はどうやら異世界から召喚された者で、しかもその記憶を読む限り人間が暮らす世界から召喚されらしい。

異世界からの召喚それ自体は、彼女の暮らす世界、銀世界では大して珍しいことではない。

召喚術師という職業の存在が示すように、異世界の存在は公に認められているからだ。

人格をしっかりと持ち、人型をした精霊やら魔物を異世界から呼び出すことができる以上、人間が普通に暮らす異世界があつてそこから呼び出される人間がいても何もおかしいことはない。

しかし、彼女エルルカの目の前の少年が抱えている問題は簡単なことではなかった。

普通の召喚であれば召喚者と召喚された者の間に契約が取り交わされるが、少年には召喚者が存在しない。

通常召喚された者は、召喚者の魔力の供給が僅かでも必要である。

肉体保持の魔力自体は界血カイケツを変換すれば良いのだが、世界に存在している表明をする魔力は召喚者から供給されたものでなくてはならない。

ところがこの少年には何処からも魔力の供給はなく、契約魔方陣も見当たらない。加えて体は界血の変換も行っていない。

それならば彼は一般人と何ら変わらないと言えた。

しかし界魔術を行使された証拠として彼の因果律は完全に捻れてしまっている。しかも魔術を学んだことのある者なら人目で解るほどに。

加えて原因不明の大規模な空間の歪みが王宮魔術師に補足されていることを先ほどの報せでエルルカは知った。

そして通告なしの召喚術行使を行った召喚師を捕えるために教会騎士団が動いていることも。

召喚者がいれば召喚者にとりあえずの罰金、または研究成果の没収。酷い場合は保護観察もこれに加わる。

しかし召喚者が不在の召喚 基本的にそういった場合は召喚獣が主を殺したことがほとんどであるが そういったイレギュラーはエルルカの住む白の国では処分対象、すなわち殺されてしまう。

それが珍しい素体であれば生かさず殺さずの状態で生涯実験道具となることは確定事項だ。

「胸糞悪い話だとは思わないか、フィーレ」

そう呼ばれた真っ赤な髪青年は頷いた。

「しかし、随分と記憶の構成が滅茶苦茶だな。父母の死亡前後の記憶が全くないのは精神的ダメージを慮れば仕方がないでしょう。

しかし映像で見る限り、この頃は5、6歳、それ以前の記憶が全くないことはありえん。記憶を何らかのショックで失ったか、蓋をしているか。ふむ、もう少し調べて見るか・・・」

そう言っただけで持っていたキセルを少年に翳そうとするエルルカをフィーレはじつと見つめる。

単純な腕力ではエルルカより数十倍上の炎霊のその視線は非常に冷たい。

「じよ、冗談だよ、冗談。しかし一応この国にも法というものはある。異世界からの召喚者は契約が無い限り殺さねばならんぞ。お前もわかっていようフィーレ」

「存じております。しかし主よ、彼の処分については、どうにかお情けを与えることは罷りなりませんか」

「私も大天才とは言え一応一国民だぞ。法を破ることを勧めるとは秩序の炎の体現者たるお前らしくもない」

「改めて、どうにかお情けを与えることは罷りなりませんか、と申し上げます」

「……っち。ああもう炎の精霊様はお優しいことだな！」

使い魔を睨みつけていた陰険な眼を抑え、柔らかく眼を細めながらエルルカは眠り続けている少年に眼を向けた。

歳の頃は14、5。身長は160センチメートルを越えたばかりか、柔らかそうな黒い髪。長く生きた彼女でも余り見たことのない不思議な色の髪は首筋に少しかかるくらいまでの長さ。

濡れた長い睫毛は静かに眠る少年に作り物めいた印象を与えている。

ふーむ、なかなか私好みじゃないか。弟子として連れ回しても面白いかも知れない。

いやそれとも、先ほどの私をババアと言ったことを償わせるのもいいか。

彼女には珍しく優しげだった瞳が、妖しい熱を帯び始める。

「……主が保護する気がないのなら私が保護を」

エルルカの考えていることを察したのか、鈍色の瞳が彼の仕えている主人を睨むように見つめた。

「ええい、お前は本当に冗談が通じないな！こいつは！この私！稀代の魔女にして白き炎の魔術師、エルルカ！フィンが保護するっ！文句を行ってくるならば国の連中も黙らせる！これは誓約だっ、二言はない！これでいいかっ！この筋肉ダルマめ！！」

「さすが主、賢明なご判断です。」

安心したのか、フィーレはほっと胸を撫で下ろす。

フィーレとて本気で主を疑っていたわけではない。召喚に応じたときからその魔女の本質をフィーレは知っている。

超がつくほどのお人好し。

人に騙されてもそれを自分の未熟だと恥じ、復讐よりも自己の研鑽を選ぶ。

戦乱のあるを風聞しては、金稼ぎと称して薬をタダ同然で配りに行く。商売だと嘯いて。

誰にも、自分にすら弱さを見せない誰よりも強い魔術師。

彼が仕えている主はそんな人物だ。しかし、そんな強き魔女も一応は人間のしがらみの中に生きている。

彼女の暮らす白の国の法、しかも第一法、すなわち刑執行の優先順位が高い法を見逃すのは難しいだろうと彼は考えていた。

無論、それは彼の杞憂に終わったが。

「しかしどのようなにして黙らせるのです？如何に主とて、第一法を破っては・・・」

「まあ間違はなく糞ガキ没収の上国外追放、最悪の場合死刑であるうな。」

「……何かお考えがあるのでしょう？」

「フン。……まあな。そろそろこんな国飽きてきたであろう？フィーレよ」

「ま、まさか、お、一人で戦争でもなさるおつもりですかっ！」

フィーレは自分の仕える主が、喧嘩っ早いことを思い出してその褐色の肌を青ざめさせた。

そういえば、気に入らない貴族を出会い頭に殴ったこともあるではないかこの御方は。

「んな訳あるかつ！この筋肉ファイヤー！引越すんだよ！！私を何だと考えているんだっ！」

「……常に自身の力のなさを憂いている、心優しき魔術師にして偉大なる魔女、ウィズリルの意思を継ぐ当世ただ一人の正統継承の魔女です」

「……全く調子のいいことだ。持ち上げておけば私が黙るとでも思っているのか、畜生！その通りだッ！ふん、そうとなればさっさとずらかるぞ！お前は荷造りしろ！私は少し出かけてくる！」

「かしこまりました。して、彼はどうするのですか？」

「起きても暴れないようにベッドに縛り付けとけ！運ぶときは魔法の鞆につっこんどく！」

「少々手荒ですが、それが一番安全ですね。承服しました。」

ドタドタと怪獣のような足音を立て部屋を後にした主を見送り、フィーレはどこからともかく皮製の紐を手にし、規則正しく寝息を立てている少年を見つめた。

この少年は、危うい。

記憶からそう判断しただけではない。持っている力も、取り巻く現状も余りにも不安定。

守らなくては、ならない。

あのとき、守れなかった人々の為にも。それがきつと償いになるから。

「おい！」

エルルカの声が回路を通してフィーレの頭に響き渡る。

「先ほど言うのを忘れたが、私を説明するときは大天才というのをきちんとつけとけ！このヤンキーヘアー！」

「……了解致しました。大天才エルル力様」

顔を赤く染めながら、プンプンと本当に聞こえるように怒っている
であろう自らの主人を思い浮かべ、炎の精霊はその厳しい顔を柔ら
かく微笑ませた。

まだまだ、夜は明けそうにない。

魔女と使い魔（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔？（前書き）

1 / 13 改訂で忘れていた部分を追加

魔女と使い魔？

「あのー……」

返事はない

「あのー……」

やはり返事は返ってこない。男はこちらを見ずに作業に没頭している。

眼が覚めると待っていたのは黙々とベッドに俺を縛り付けている、赤髪の筋肉質な男。更に情報を加えるならその男が上半身裸だっところか。

率直に言つと俺は激しく身の危険を感じている。

お、俺は断じてホモじゃないぞ。断じて！

誰かに言い聞かせるように心の中で叫ぶ。

女の子と話すことが苦手なことや、胡散臭い得体の知れない男、つまりトウノの面倒ばかりを見ている俺を指して実は俺が男が好きなのでは、と言う友人は多い。

ただでさえ数の少ない友人の中で、そう言うヤツが多いのだ。

俺がどういう偏見を受けているか想像するのは容易だろう。

このままじゃ、ヤバイ。いろいろな意味でヤバイ。

このまま完全に縛り付けられるのを待っているのは間違いなく危険だ。

俺はもう一度勇気を振り絞って、困難に立ち向かうことを決意した。

「あの！」

力が入ったせいか、体が少しずれて縛られていた紐が胸のあたりに食い込む。

「い、痛っ」

「……動かないで頂きたい。縛るのが困難になります」

そう言つて少し困つた顔をした男はぐいと力を込め俺の体を先ほどの位置に戻した。

いや、実際は露ほども力を込めてなどいないだろう。それほどまでにこの男の腕は力強く、太い。

怖い。でも何が何やらわからないし、このままでいるわけにもいかない。

俺は意を決して再び男に話しかけた。

「あの、ここはどこですか？」

「……ここは白き炎の魔術師にして唯一の正統血統の魔女、大天才エルルカ「フィン様の居城です」

「はぁ……」

魔術師？魔女？大天才？エル……なんとか？キョジョウ？

一息に知らない言葉が幾つも出てきて俺は混乱する。

いつのまにか男はその目的を終えたのか、ベッドから2、3歩下がったところに立っていた。

俺は取り敢えず質問を続けることにする。

「あの、魔術師って」

「申し訳ないが、私は詳細な説明をすることを許可されていません」
「はあ……」

駄目だ、わけわからん。

男は恐らくこのままじゃ何も答えてくれないだろう。

眼を閉じ、直立不動に立っている男。これ以上話すことはない、とでも言いたそうな横一文字にきつく結ばれた口。

俺はそんな男を横目に今自分がいる部屋の様子を窺った。

今俺が寝ているベッドはかなり広く、天蓋が備えられたものだ。かなり豪華な造りをしている。それこそ物語の王様ベッドみたいに。

隣には丸い小さなテーブルと、椅子。ともに木でできたもので、暖炉の灯りが柔らかく反射している。

テーブルの上には凝った細工の陶器のジョッキと小さな樽。それと一冊の本。

部屋の広さは、6畳ほどの自分の部屋が4つ、5つ入るほどはあるだろう。しかし固く縛られているせいで見える範囲はとても狭い。恐らくは俺の想像以上に広い部屋だろう。

とりあえずの観察を終え、男に眼を向けると、それを待っていたかのように彼はその眼を開いて俺を見据えた。

怖い。

身構える。見られるだけで震え上がりそうになるほど男の瞳は鋭い。しかし、男が口を開いて話したことは俺の予想外のことだった。

「申し訳ありません。不安でしょうが今は我が主をお待ちください。決して、悪いようにはいたしませんから」

本当に申し訳なさそうに、男は俯く。

ズルイ。さっきまであんな怖い顔してた癖に。

そんな悲しい顔されたら、何も言えなくなるじゃないか。

ふと、いつも優しくかった、たった一人の自分の家族を思い出した。口うるさくて、いつも俺に甘くて、だけど傍にいて欲しいときにいつもいない男。

俺は男から顔を逸す。今の自分の顔を誰にも見られなくなかった。

もう、会えないのかな。あいつに。

漠然とそんな不安を抱えながら、俺はこの男の主人を待つことにした。

ドッ、ドッ、ドッ、ドッ。

忙しない足音の後、部屋の扉が勢い良く放たれた。

そちらを向くと一人の女の子が部屋に入ってきている。

「オイ、今帰ったぞ」

「どちらに行かれていたのですか」

「馬鹿弟子のところだよ。偶にはあの馬鹿に役立って貰おうと思っ
てな」

「……なるほど、リラ様ならば大丈夫でしょう」

「本気かあ、フィーレ。あんな馬鹿のどこにダイジヨウブ要素があるんだ。脳みそまで筋肉にしてどうするんだ。ん？
とりあえず頼んでみたけど、なんか不安だったからついでにヒゲ野郎にも頼んできたぞ」

あの子は、あ、さっきのロリババア！……と言ったらぶん殴られたんだっけ。気を付けよ。

先ほどの女の子は、男と親しげに話している。どうやらあの男の名前はフィーレと言っらしい。

「……ん？なんだ、そいつ鞆に突っ込んでなかったのか。さっさと突っ込まんか。今すぐにでも出るぞ」

女の子は俺を見ると乱暴に言い放った。

カバンに突っ込む！？し、死体遺棄されるのか！？くそっ、チビロリババアめ！

俺は威嚇するように女の子を睨む。その隣で男は何か考え込んでいるように見えた。

「……ああん？ 何かこいつ腹立たしいこと考えてる気がするぞ。くらっ！お仕置きだっ！」

女の子がするりとベッドの端に座り込み俺の脇腹に手を突っ込んで、擦り出した。

「わっ！ちょ、お前、何す、アハハハハ、擦ったいって、やめ」
「お、こいつはいい。よく考えたら悪戯しほうだいではないか。…

：それにしても、ふーん、ちゃんと見ると笑った顔も中々に可愛いじゃないか、なあに深刻そうな顔してたんだ？」

どれ、お姉さんに言ってみろ、とばかりに女の子は俺を見てニヤリと笑う。

ぐっ、年下のくせに生意気な！ 絶対仕返ししてやる！

「エルルカ様、少々よろしいですか」

「んあ、なんだ。つつかさつさと鞆にしまえ」

顎でくいとエルルカと呼ばれた女の子は俺を指す。エルルカ、変な名前だ。どうやらこの子が先ほど言っていた大天才様とやららしい。

「いえ、それはできません」

「はあ！？何を言っている！ 足手まといを連れて歩くほど余裕はないぞ！ 反抗期なのかその年と顔と図体で！」

「ゴホン。……彼は召喚術師としての優秀な適性を持っているようです。魔力色から魔性を惹きつける香りを感じます。魔術道具も入っている鞆の中だと、封じている魔物を引きずりだしてしまう可能性があります」

「何だと？ それは本当か？」

「はい、間違い有りません。自分で言うのもなんですが、私ほどの霊格を持った精霊でさえ惹かれています、封じ込めてあるような小物など一溜りもないでしょう。」

「……ほう？なるほどなあ」

エルルカは立ち上がり、考えこむようにぐるぐる歩き出した。シャン、シャンと、とんがり帽子の上に乗っかっている鈴が愛らしい音を響かせる。

「それに」

「それに？」

「彼はあなたの好みではありませんか。線が細く、中性的だ。国からの愛の逃避行するというのも良いのではないですか」

「「な!？」」

同時に声をあげる俺とエルル力。

「ばばばばばば馬鹿なことを言うな、赤筋肉!　だ、誰の好みだ誰の!」

「そ、そうだ!　自分が筋肉いっぱいだからって人のことを細いだの中性的だの!　ひ、酷いぞ!」

「……なかなか気も合うようではないですか」

そう言つて男は微笑んでいる。その顔はひどく優しい。

先ほどまでの怖い顔は一体なんだったのか、と俺は首を傾げた。

「……しかし、確かにこいつをいじつて遊びながら行くのも悪くはないな。ふん、わかったよ、私の負けだ負け。紐を外してやれフィーレ」

「ありがとうございます」

この男の名前はフィーレというらしい。

どこからともなくそいつはハサミを取り出し、パチン、パチンと1つずつ俺を縛り付けている紐を切つてゆく。

「あの、フィー、レさん？」

「なんでしょうか」

一度手を止めて彼は俺の方を向いた。

「あの、質問、いいですか。俺、どうなっちゃったんですか」
「それは……」

言い淀むフィーレさん。

「その答えは後だ。時間無いんだからキビキビ行くぞキビキビ。あー、そうさな、簡単に言っと
私エルルカ、大天才、こいつ、筋肉、私の下僕。私たち、オマエ、
助ける」

なんで片言なんだ。

なんだかよくわからないが俺は気が抜けてしまった。

意味のわからないことばかりだけど、少なくともこの人達は単に底
抜けにお人好しでお節介なだけではないか。

俺は少し難しく考えすぎているだけなんじゃないだろうか。

そんな風にあれこれ考えている内に俺を縛っていた紐は全て断ち切
られていた。

「泉殿、その格好はさすがにまずい。こちらに服を用意したので着
てください」

「え、あ、はい。ってか何で俺の名前……」

フィーレさんは答えずに薄い茶色の布を差し出している。

それを手に取り見てみると恐らくは頭を出すための穴、腕を出すた
めの穴がアバウトに空けられている。

これが貫頭衣ってやつか？

少し切るのに抵抗はあるが寝間着で行動するのも気分が良いものではない。俺はそれに着替えるために寝間着のボタンに手をかけた。

「はぁ、はぁ……」

誰かの荒い息遣い。

エルル力がじつと俺の今まさに手をかけている胸元を凝視している。

うつ、脱ぎにくい。

しかし着替えないわけにもいかない。俺は意を決してボタンを外してゆく。

「お、おお！ これは良い催しだ！ 流行るぞ！ ゆっくりと焦らすように外すのだイズミ！」

「主よ、泉殿が着替えにくいようです。外で待っていきましょう」

「ぬおおお！ 放せ！ 馬鹿炎！ 主を引きずるとは何事だ！」

暴れながら変態ロリババアは引きずられてゆく。俺はいない今のうちにと急いで脱いでその貫頭衣を被るようにして着た。

「おお、意外にぴったりだ」

大きすぎるかと思ったそれは俺には誂え向きだ。

肩の部分も最初は縄文時代のそれみたく角張っているのかと思いきや丸みを帯びていてきちんとフィットしている。

素材も柔らかく、肌に心地よい。

「あの、着替えましたけど」

すぐにエルルカとフィーレさんが部屋に入ってくる。

エルルカはムスツとして機嫌が悪そうだ。一方のフィーレさんは涼しい顔をしている。

「それではこちらの紐を、腰のあたりで縛ってください。背中に通す穴があります。これは魔力色を抑えるものですから、決して外さないように」

そう言つてフィーレさんは黒い皮つばい紐を俺に手渡した。正直、皮の紐にはいい思い出がないのだが俺はそれを言われた通りに結びつけた。

「・・・おい、それ何だ？」

黙っていたエルルカが声をあげる。

「ですから魔力色を抑える魔術道具だと言いましたが」

「そんなもの私は知らんぞ」

「それは当然でしょう。私が買ってきたものですから」

「買ってきた？ まさかお前！？」

エルルカは床に落ちている鞆をガバツと開くとその中に手をつ込みまさぐり始めた。

「無い、無い、無い、無い、無いっ！！ お前、フィーレ！ まさか私の宝石を」

「使いました。あれだけたくさんあるのだから別に良いでしょう、減るものではありませんし」

「減ってるではないか馬鹿者っ！！ あ、あれを集めるのに私がど

れだけ……！」

「ふむ、ならば同様に価値あるものと変わっただけと考えればいかがでしょうか。泉殿、こちらのローブを羽織ってください」

エルルカが真つ青になったり真つ赤になったりして口をパクパクフイーレさんを見ているのを、横目に見ながらそのローブを羽織る

「それとこちらの靴を」

どんどん出てくる謎のアイテム。俺は今度は差し出された濃い茶色のブーツを履く。どう見ても大きかったのに履いた瞬間、それは俺にぴったりのサイズに縮んだ。

しかも履いていないかのように軽い。俺が不思議がっていると、フイーレさんが説明してくれる。

「それは霊具と呼ばれるもので、精霊の作ったブーツです。履いたものの姿形に自動的に合うような魔術がかけられているのですよ」

「今度は、霊具だと……！？」

「はい、霊具ですが、何でしょうか」

「貴様、使い魔だから霊具は作れないと言っておっただろうが！」

「無論、作れません。ですので友人に売ってもらいました」

「な、何を使った！今度は何を勝手に金に替えて使ったのだ！！」

「ええと、確か。そくだ、青の国に持っている土地と建造物の権利書を」

「は、ああああ……」

へなへなとその場に座り込むエルルカ。眼が最早正気のものではない。

「お、お前、お前！！ いつもいつも私のモノを勝手に売りおって

！！ 今日という今日はゼツツツツタイに！ 許さんぞ！
起動、起動、起動、起動、起動、起動、起動、起動、起動、起動せよ！！
！！」

エルルカの絶叫に合わせて部屋中の壁という壁から巨大な顔、そう
まさに、人間の顔が、9体現れた。

それらはみな違う容姿で、性別も様々。だがどれも一様に肌は土気
色で瞳が閉じられている。

顔の軍団はふわふわと浮かびながら俺たちの回りを囲み始めた。
俺は奇怪な光景に息を飲み、声をあげそうになるのを耐えた。

「まさか主が私の知らない罠を仕掛けているとは思いませんでした」
本当に困った、とでも言いたそうなフィーレさんの顔。

「何とでも言え！ これは貴様を懲らしめるために私が開発し
た魔物。そう簡単には倒せぬぞ。 さあ、お仕置きの時間だ！！」

思いつきエルルカが息を吸う。その赤い瞳が更に深い赤に染まる。

「我が眼は、不浄の瞳。潰せ、閉じよ、潰せ、開け！！！」

瞬間、部屋は絶叫の渦に飲まれた。

悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴。
一斉に眼を開いた顔たちは耳を劈くような悲鳴をあげる。

「うわああ！！！！」

俺は思わず耳を塞いだ。周囲は眼から血を流して、口を裂きながら

泣きわめく顔。

その白い肌には赤黒い太い血管のようなものが蜘蛛の巣のように浮き上がっている。

俺は鼓膜が破れそうな音の渦のなか、それから眼を離せなくなっていた。

まるで吸い込まれるかのようにそれを見つめている。

何か、いる。

時折、どくん、どくん、と大きなものがその管を通過している。あれは

『ニタア、と俺を見つけるとそいつらは嬉しそうに笑った』

小さな顔だ。

嫌だ！ 怖い、怖い、怖い！！

その場に座り込む。何も考えられない。ただ、恐ろしい。あれは駄目だ。見てはならないもの。在ってはならないもの。

胸を込み上げてくる何か。じわじわと汗が浮かんでくる。カタカタと体は震え、眼からは涙が零れ落ちた。

そのときそつと頭に手のひらが置かれた。

「あ、トウノ……？」

「申し訳ありません、泉殿。何やら主を怒らせてしまったようです、しばらく眼を閉じてお待ちください。何、いつものことですからお気になさらずに」

「う、うん……」

まるで子供をあやすような温もりを感じて

、俺は幼いときに戻ったかのように、ただ頷き、眼を閉じた。

「エルル力様、謝りますから、もうお止めください。泉殿もいるのですよ」

「いや、許さん。貴様、勝手に宝を持ち出すには飽きたらず私の玩具にベタベタ触りおつて。その罪もついでに洗い落としてくれるわ!!」

「はあ……。つい数時間前に初めて顔を合わせたただけなのに随分と気に入られたんですね。全く。時間も無いのですよ」

「ならさつさとお前を『申し訳ございません、エルル力様。一生私めはあなた様の靴の裏にひつついたキノコでございます』と泣きながら謝らせるまでだ!!」

エルル力はその秀麗な顔の前でグツッと手を握る。

「呪え」

それは最もシンプルな呪文。何万年も前からある原始の呪い。神々ですら抗えぬ、この大地に無数にある憎悪の印。

泉殿が怯えたのも無理はない。これは人にこそ最も恐ろしい魔術だ。

悲鳴が急に鳴り止む。

再び瞳は閉じられ、顔たちはその場から動かない。時は満たされたのだ。

黒い血管をぶち破って数多の小さな顔たちが産まれ出て、フィーレを襲い狂う！

「ふははは！！ 泣け！！ 叫べ！！ 跪け！！ 今なら軽い腹痛で抑えてやる！！」

そうこれは、これこそが病の根源。悪神の瞳の魔術。正統血統の魔女にしか使えぬ業。

ヒュン、ヒュン、と風を切る小さな顔たち。

それをフィーレは冷静に避けている。

その動作に危うさは見受けられない。

「精霊が便所に閉じこもる姿はさぞや心地よいであろうなあ！ 因果のせいで出したいものも出せぬ苦痛を味わうが良い！！」

案の定、完全に自分に酔っておられる。これならば……。

自分の世界に入って一人で興奮しているエルルカを見て溜息をつきながらも、フィーレの顔の弾丸を避ける動作には微塵の隙もない。本来、使い魔を使役する魔術師というのは戦闘能力が高くない者が多い。

それは研究畑のエルルカも同じ事で、他の研究を主としている魔術師に比べれば格段に腕の立つ彼女も単純な戦闘なら使い魔に負ける。

こう自分の型にハマったら自分に酔い始める癖は一体何百年待てば治ってくれるのか。

苦勞の滲む顔で再び溜息をつくフィーレ。右手を前に、まるで指揮をするかのように突き出す。

「剣を持つ者は前へ」

太古の戦の火は彼の魂であり骨肉。自らの体に強制的に界血を纏わせる。異世界から召喚された精霊しか使えぬ最も単純な強化精霊法。

今は、足だけで十分だ。

ぐつ、と下半身にフィーレは力を込めた。眼に見えない熱はその足を覆う。

狙う瞬間は、次の顔の着弾の瞬間。

3、2、1。

目にも止まらぬ速さで一気にエルルカの懷に飛び込む。目標を失った顔達はべちゃべちゃと音を立てて床にぶつかりそこに溶けていった。

「げ、お前、卑怯だぞ!!」

「一流の魔術師は自らの護衛を最も重要視するといいますが、あなたはどうか?」

「く、うつ、嫌い嫌い!!」

エルルカは強く眼を閉じ念じることで顔たちを呼び寄せた。

小さな顔は呻き声をあげながらフィーレに突貫しようと向きを変える。

しかしそれこそがフィーレの狙い。

「あ」

ぺしん。

間拔けな音を立てて、エルルカの頬に小さな顔が当たった。

「……」

「……あたた」

エルルカいつのまにか自分の背後に移動している男を恨めしげに眺め

「解除」

とその腹を撫でながらポツリと呟いた。

「エルルカ様、泉殿に謝ってください」

「あ、う、す、すまん……」

「そんな小さい声では聞こえませんよ」

「なんで私が悪者みたいになっているのだ！元はと言えば全部貴様が悪いのではないか！……ぐ、いたた」

相変わらず二人は言い争っている。

俺が必死に耳を塞いでいたらいつのまにか二人のケンカは終わっていらしい。

先ほどみたく、手のひらを俺の頭の上に置いたフィーレさんは例の

如く申し訳なさそうな顔をしていた。

あれほどの騒ぎだったのにも関わらず、部屋はほとんど汚れていない。

エルルカに聞いてみたところ

「ああ、アレは腹痛の呪いの塊だからな。基本的に物質的破壊は伴わん」

らしい。

腹痛にあれほど怯えた自分が愚かだったのか、腹痛にあそこまでホラーを演出するエルルカが愚かだったのか。俺には結局判断できなかった。

しかし不思議と、俺の心は当初よりもずっと穏やかなものとなっていた。

たぶん、あれだけのアホなケンカを見て、もう何でも許容出来る気持ちになったんだろうな。

結局、そう適当に自己分析することにした。

窓から入ってくる光はキラキラと虹色の粒子をばらまいて、部屋中に散っている。

その中にいると、エルルカはまるで絵本の妖精のように愛らしい。俺がちよっとだけドキドキしながらその妖精を眺めていると、そいつは頭の帽子の中に手を突っ込んだと思うと、変な瓶を取り出してその中に入っているキノコをボリボリ食いだした。

「な、何やってるんだよそれ……」

「んあ、腹痛止めたよ、全く糞が出ないのに腹痛とはどういったプレイなのだ……」

なんだかよくわからないことをブツブツ言っているが、俺はこの少女に取り敢えず聞かなきゃならないことがある。

本当は一番最初に聞かなくてはならなかった疑問。

答えを知るのが怖くて、聞けなかった疑問。

「なあ、エルルカ」

「なんだよ」

「俺、元の世界に帰れるのか？」

エルルカはキノコの入っていた瓶をまた帽子のなかに突っ込むと俺を見て、その桜色の唇の端をニヤリと上げて

「そんなもんは知らんし、わからん。だが」

くるり、と何故か嬉しそうに一回転した。

「どうせ時間はたっぷりあるんだ。ゆっくり一緒に探してもいいんじゃないか？」

そう、向日葵のような笑顔で言った。

元の世界に未練が無いわけじゃない。

会えるものなら今すぐにでもトウノに会いたい。たった一人の家族に会いたい。

今なら幾らでもあいつの好きなごはん作って、くだらない話に付き合って、ちゃんと「いつてらっしゃい」って顔を見て、言える。

あの家で、俺とトウノしかない世界で、誰にも知られず生きていくことに未練が無いなんて、俺はまだはっきりとは言えない。

けれど。

しばらくこの変な世界で、こいつらと一緒にいてもいいんじゃないかって俺はこのとき少なからず思った。

「泉殿、紐は間違いなく締めていますね」

「あ、はい。大丈夫です」

俺は自分のお腹の辺りを見て、紐がしっかり縛ってあるのを確認する。

「それが無くては魔物に狙われる可能性もありますから、くれぐれも注意してください」

「はい。あ、ありがとうございます」

どうもフィーレさんと話すのは緊張する。トウノはこんな筋肉なかったし、俺もへなへなだから、憧れているのだろう。

「はぁ……。私にとっては数十年ぶりの腹痛と、二度とお目にかかれぬ稀少な真緑鉱石の原石を思い出す記念の紐となるわけか」

哀愁に満ちた表情で、俺の腰紐を見つめるエルルカ。しかし次第にその顔は険しいものとなってゆく。

「……おい、まさか。フィーレ。貴様、私を謀ったな」

「……？ 申し訳ありませんが、仰る意味がわかりません」

「この紐ありや別にこいつ鞆に入れて大丈夫じゃないか。何が鞆に入れては危険です、だー！」

「おお、たしかにそのとおりですね。さすがはだいてんさいえるるかさま」

「き、貴様、馬鹿にしおって……」

エルル力はまたしても怒りのせいかプルプル震えている。おまけに頭の鈴も鳴っている。本当に忙しいやつだ。

そういえば、今から歩いてなんだかの国に行くとは聞いたけれど、そもそもどうして俺達は逃げるのかを俺は知らない。

「そういえば、なんで俺らこの国から逃げようとしているんですか？」

フィーレさんに訊ねてみる。

「ああ、それは泉殿はこのままじゃ殺されてしまっからですよ」

さも、言つの忘れてた、って顔で言う長身の男。

トウノ、やっぱり帰りたいよ、俺。

魔女と使い魔？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

団長殿の憂鬱（前書き）

僅かでもユニークがあると本当に嬉しいですね。読みづらい点あると思いますがこれからもよろしくお願いします。しよっちゅう改稿すると思いますので、ご迷惑をおかけします。

団長殿の憂鬱

カリ、カリ。

規則的に手を動かし続ける。

豪華な騎士長専用の執務室は意外と寒い。

私は身震いしながら、酒入りの紅茶を含む。野性味の強い野の花み
たいな香りがするそれは、エルル力様から教わった魔女の故郷の味。

カリ、カリ。

先ほどから書き続けている書類は先程の未通達の界魔術行使の報告
書だ。王宮魔術師からの報告書は回りくどい言い方ばかりで読んで
いて肩がこる。

要は何があって、どうして欲しいかを書けばいいのに、まず何が起
きた理由をつらつらと述べて、結局起きたことは最後の最後に書い
てあるだけ。

ああ全く、頭が痛くなる。これがお役所仕事というやつか。まあ私
もそのお役所の人間だが。

ああ、あれもそれも、先程エルル力様が窓から執務室に飛び込んで
くるや否や

「さっきのアレ、無かったことにしろ。師の命令に背いたらどうな
るかかわかっていような？」

なんて仰ってきたからだ。本当にあの人は無茶苦茶なお方だ。

そういえば、剣の修行をしていた私を魔術に対する裏切りだのなん
だの言って、一晩中木に吊るしたこともあったっけ。ああ思い出す
と暗い気持ちになる。嫌な青春だ。

第一、あれだけの規模の界魔術行使を見逃すなんて都合の良い話早々あつてはたまるものか。

私にも立場と言うものがあり、法の体現者たる教会騎士としての誇りもある。

だがエルルカ様の子弟として私の最初の誓約は『師の命に決して背かぬこと』

……八方塞がりとはこのことを言うのだろうか。

そんな訳でこんな夜明けまで書類を何とか弄り回しているというわけだ。

落とし所とすれば一週間程度搜索を遅らせることだろう。しかし本当にそんなことできるのだろうか。

コン、コン。

ドアが叩かれる。私はペンをインク壺に突っ込んだ。こんな時間に来るヤツは一人しかいない。慌てて髪を整える。

「誰だ？」

「副騎士団長ヒューム、ただいま参りました」

「む、入れ」

入ってきた壮年の男は私の右腕たる副騎士団長ヒューム。

元は奴隷身分だったというのに叩き上げでこの地位まで来た優秀な人物。

生まれのせいかわ魔術は不得手ではあるがその槍術たるや白の国一と言つて過言ではない。

これは覇眼目でもなんでもない。恐らく魔術なしの勝負だったら私でさえ負けてしまうことだろう。

しかも冴えているのは武の方面だけではないのだ。各国を回つたと

いう知識は幅広く、政治学から簡単な医学、地方にしか伝わらない詩歌まで様々な事柄を修めている。

ああ、ヒュームはかっこいいなあ……。

そう、何を隠そう彼は私の初恋の人にして純潔を捧げるべき人物だ。

彼との出会いは私の叙任式の後のことだった。

前任の団長は年齢を理由に辞任。規定により副団長も退任していた。団長が騎士としての功績をもとに選ばれるのに対して、副団長の人事と言うのは外部から功績のある者が団長の任官後に議会から推薦される。

これは騎士団の権力もとい教会の権力を上げすぎないための措置だ。歴代の団長のほとんどが副団長との軋轢に悩まされていると聞いていた私は憂鬱を隠せないでいた。

「団長になれたのは嬉しいけど、このままじゃ行き遅れになっちゃうよ……」

私が頼杖について物思いに耽っていると、ドアがノックされ、そう先ほどのように壮年の長身の男が入ってきた。

固そうな黒髪は全て掻き上げられ油で固められている。鋭く光る青い瞳は武人のモノだ。

こいつ、強いな。

戦士の嗅覚で私は彼を観察をする。がっしりとした体軀はそれでいて靱やかさを感じ、何よりこの力強さを湛えた腰は、槍使いのものだ。

私は真新しい甲冑を着ている彼が副団長であるとき確信していた。

「失礼致します。この度副団長に任命されたヒュームと申します。元奴隷階級のため姓が無いことをお許しください。

貴殿がリラ・メイスト団長でお間違いないですね。……ああ、噂に違わずお美しく聡明そうなお方だ。あなたの下に仕えることができ大変光栄です」

「……安い世辞は良い、ヒューム副団長。任官の挨拶ご苦労。我々は法に仕える騎士だ。私に仕える必要なぞ無いぞ。

議会派、教会派関係なく我々はこれからは同僚だ。例えその思惑がどうであれ、仲良くしたいものだな。」

「はい。私もそう思います。……ところで団長殿、詩は読めますかな」

「随分と不躰だな。私も騎士だ。ある程度は嗜んでおる」

「これは失礼しました。しかしそうですか。私もよく詩を読みます」

「ふん、嗜む程度だと言っているだろう。しかしその年で詩とは随分と雅やかなことだな」

「お恥ずかしいことです。しかし詩を好きでいて良かった。あなたと血生臭い話だけでは寂しいですからね」

そう言つて屈託なく笑う男はあまりに邪気が無くて、警戒していた私の牙をあつという間に砕いた。

そして、私の、この心も。

今まで、騎士として武術魔術の修練の傍ら、いつか素敵な旦那様のお嫁さんになりたいと思ひ、料理やら裁縫やら詩歌を学んできた。それをこの男に捧げたら、枕を共にし、愛の詩歌と一緒に語れたら、なんて……。

と、いかんいかん。今は腑抜けている場合ではない。ヒュームが私の言葉を待っているじゃないか。

「どうしたんだこんな夜更けに。すまんが案件が溜まっていてな。

要件を言え」

「はい。団長、先程の界魔術ですが・・・」

い、いきなり、触れて欲しくない話題、だと！ ま、マズイ……。
というか魔術ベタなヒュームですら気がつく魔術行使をどうやって
隠し通せばいいのだ。

「ん？ んん？ そ、そんなの無かったぞ！ な、何を言ってるんだ、
寝ぼけているのか、アハハ……」

ヒュームは眼を閉じながら言った。

「……『界魔術行使の報告』とそこの書類に書いてあるようですが」
「……うつ！」

うわあああ！ このままじゃヒュームに嫌われる。私の馬鹿ッ！ エル
ル力様のババア！

というか上にバれる！ ヒュームに嫌われてエルル力様に呆れられる。
おまけに団長をクビ？ 最悪だ！

……なんとか言い訳をしなくては。ああエルル力様、恨みます。

「ふふ、団長、こんなことではお偉方は騙せませんよ。失礼で
すが私に書類をお貸しください。何とか致しましょう」

「へ？」

どうしてヒュームがそのことを知っているの？ と私が混乱している
と、失礼とばかりにヒュームは私の机にある書類を来客用のテーブ
ルに攫っていく。

「先ほど白炎の魔術師殿が参られて事情をお話くださったのです。

法の守護者たる教会騎士として許されないことですが、罪の無い少年を殺すことは私にはどうしてもできません。

私は一人の騎士でありますから。魔術師殿と団長の悪巧み、このヒュームも協力させて頂きます」

「あ、ああ。って少年！？何だそれは、私はそんなこと聞いていないぞ！」

師匠はただ『なかったことにしろ』としか言っていなかった。

私に言わないでヒュームに言うとはどういうことだ。というかなんでヒュームに話したんだ。

「おや、そうでしたか。……ああ、実は私とエルル力殿はここに勤める前から親交がありまして。団長が任命される際に後見を頼まれていたのですよ。」

本当は黙っていると言われていましたがこの際いいでしょう」

「そ、そんな。お前、じゃあ私の任官のとき……」

「ハハハ、団長が詩を愛していらっしゃったのは聞いておりましたからね。警戒を説くために一芝居打ったわけです。」

無論私が詩を好いているのは事実ですよ。ここだけの話ですが議会もあのお方が手回したそうです。団長は本当に師に愛されていますね」

ニコツつと微笑むヒューム、やっぱりかっこいい。いや今はそれより、ヒュームと師匠が前から知り合いだと？

以前から師匠には私の恋愛相談に乗って貰っていた。何せ師匠は今年で263歳。人生経験は豊富だろうし恋愛についてもいろいろと知っているだろうと思つてのことだ。

しかし、知り合いつてことだ、あの人の性格なら絶対……。

嫌がらせという名の愛情が成功して愉快そうに笑う魔女を私は思い浮かべた。

「先に言っておきますが、私は団長のお気持ちに今はお応えできません」

バラしてやがった、あの糞ババア！ 案の定だ！ 100歳鯖読んでる癖に若者の未来を邪魔しようと言うのか！

「しかし」

「？」

「それは団長が私には美しすぎるからです。……ですからもう少し待っていてください。団長に釣り合うような男になれば私から恋愛致しましょう」

ズキューン！

か、か、かつこいい！ ヒュームはやっぱり世界一だ！

「さて、早速ですが書類の改竄から始めましょう」

「う、うん。あたし、どうしていいかわからなくて」

「……団長、そういった口調は風紀の乱れに繋がります。謹んでください」

「うきゅー……」

白の国教会騎士団団長リラ・メイスト31歳。彼氏いない歴31年。花嫁修業が少しだけ報われた一日であった。

団長殿の憂鬱（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔？（前書き）

説明回な感じですよ。 1 / 12 改訂終了

魔女と使い魔？

「お！あれは魔女様の馬車じゃないか」

「魔女さま、この前はお薬ありがとうございました」

「まじよさまー、あそぼー」

小さな村のど真ん中を走る街道はお祭りのような騒ぎになっている。

「ええい！煩いぞ、愚民ども！ジョナサン、処方した薬は酒で飲むなということをお忘れてはおるまいな！エリカ、腹の子供のために栄養をきちんと取れ！金が足りぬなら旦那を殴つてでも働かせよ！ヨシユア、お前今年40だろ、さつさと結婚しろ！母親も安心して死ねんぞ！ええと、それから……」

幌馬車から顔だけ出して、怒鳴り続けてい老婆もとい少女。とてもシユールな光景だ。

「す、すごいですね」

「主は慕われておりますから」

御者台のフィーレさんが自慢気に微笑む。

俺たちはあの城を出てから広い道を馬車でずっと突っ走っている。

歩いて行くと聞かされていたから少し拍子抜けしたけれど、文句を言える立場では無いのでとりあえず俺は黙っている。

あの城、と言ったが、本当にあそこは城だった。ヨーロッパの山奥に佇む古城って感じた。廊下は真っ赤な絨毯がひかれて、なんだかよく解らないけど高そうな花瓶とか絵画が飾っており、

入り口のホールには騎士の鎧が整然と並んでいた。

こんな状況でもなければ記念撮影でもしてトウノに自慢してやりた

いくらいに凄かった。

でも、こんなに目立っていいのかな……？

フィーレさんから先ほど聞いた通りだと、俺は今命を狙われているようだ。

しかしここまで暢気な逃亡をしていると、そんな実感湧かなかった。

「でもこんなに目立って大丈夫なんですか？俺、追われてるんですよ」

「心配には及びません。リラ殿が足止めをしていますから」

「はあ……」

足止めてくれているリラと言う人もまさかこんな目立つ逃走劇を繰り広げるとは思っていないだろう。

「おい、そろそろ飛ばしていいぞフィーレ。大体終わった」

叫び続けて疲れたのかぐったりしながらエルルカが座り込む。その動作で風が立って、女の子のニオイがして俺はドキドキした。

近くで見ると彼女は本当に美少女だ。その金の髪は絹糸みたく艶々していて白い肌は興奮のせいか紅潮している。

余り広くない幌馬車の中じやどうしても近寄らなくてはならなくて、俺は彼女の甘いハチミツみたいなニオイにクラクラしながら彼女に近づいていった。

まるでそういう習性の虫のように、ふらふら、ふらふらと、馬車の中を這うように。

エルルカはそんな俺に悪戯な子猫めいた微笑を浮かべて……。

「チッ、そのフード、なかなかの魔術防御だな。誘惑魔術の効きが

随分悪いぞ、フィーレ。本当なら今頃裸にされているはずなのに」「ん、あ、あれ？ う、うわ！ 何でこんな近くに！ お前何しやがった！」

俺は慌ててエルルカから離れる。良くみて見れば、いや見てみなくてもこの馬車はとても広い。

6人は優に寝そべれるようなスペースが確保されている。

「フフン、どうした坊や。目の前にこんな美少女がいるんだ、さあカモン」

エルルカの眼がタクワン型になってニヨニヨこちらを見ている。子供の癖に生意気な。俺は思わず彼女の頭を拳骨で軽く殴った。

「い、いてっ！ おい！ 貴様立場を弁えぬか！ この大天才エルルカ様に手を出した罪は……」

「悪ふざけはいい加減にしてください、主よ。そろそろ村も抜けました。良い頃合いでしょう。」

泉殿、我々はあなたのことをほとんど知らない。順序があべこべになって申し訳ないが、自己紹介をお願いしたいのですがよろしいですか？」

「オイ！ 勝手に進めるな馬鹿者！ いいかイズミ！ 自己紹介するんだ自己紹介！」

なんだか滅茶苦茶だがそういえば俺も実際何が何やらまださっぱり解らない。

今わかっているのはここが異世界だということ、エルルカが魔女でフィーレさんはその使い魔で、俺はなぜか殺されそうになっている、このことくらいだろうか。

城から出るときはフィーレさんとエルルカがずっと言い争っていて

（エルルカが一人で騒いでいただけたけど）なかなか話しかけられなかった。

俺はとりあえずきちんと自己紹介をすることにした。

「俺の名前はなぜかもう知ってるみたいだけど、泉。^{イヌミ}年齢は16歳で見ての通り男。んで日本って国出身。えっと寝てたら空から落ちてる途中だった……？」

「なんだその訳の解らん自己紹介は」

「ごめん、俺もよくわかっていないんだ。夢だと思ったら夢じゃないって、えーと」

エルルカはムスツとした顔で俺を見ている。どうやら今の自己紹介じゃ彼女は満足できないようだ。

何か付け足すような情報が無いかと考えていると、フィーレさんが俺に訊ねる。

「失礼、泉殿、貴殿に姓はないのですか？ 我々の世界では姓の無いことは奴隷階級を意味するのですが」

「ど、奴隷？ まあある意味奴隷っちゃ奴隷だけど、奴隷階級じゃないですよ」

俺が奴隷なら家事奴隷ってヤツだろう。俺は自慢ではないが炊事洗濯掃除どれを取っても完璧だ。

それにしてもこの世界にはまだ奴隷がいるらしい。

奴隷制が前の世界でいつまであった制度かはよくわからないけれど少なくとも俺の時代では無かったはずだ。

「お気を悪くしたなら申し訳ない」

「いやー、全然大丈夫です。俺の世界には多分知っている限り奴隷階級はいないですよ。えっと俺の姓でしたね。確か今は川田だった

けな」

「ほー、奴隷がないか、そいつはいい。んで、お前の姓力ワダだったか？ 変な響きだ。それに『今は』とはどういう意味だ？」

「ああ、扶養者がしょっちゅう苗字変わる人だったからなあ。」

「??????」

胡散臭げな眼でエルルカが俺を見てくる。……しょうがないじゃないか、これは事実なんだから。

俺の面倒見ていたトウノは何の仕事しているか分からないが苗字がよく変わる男だった。

といっても苗字が変わったところで俺には何の関係もない話だったから特に困ったことは無いけれど。

結婚詐欺で金を稼いでいたっていうのが俺の予想。つくづくあいつは最低な男だ。

「まあ良い。次は我々が改めて自己紹介しよう。私は白き炎の魔術師にして正統血統の魔女、大天才エルルカ「フィン。んでこいつは筋肉ダルマだ」

「……私はエルルカ様の使い魔、火の精霊、フィーレと申します」

誇らしげにその平たい胸を張るエルルカと、そんなエルルカを横目に無表情のフィーレさん。

筋肉ダルマ、いや確かに筋肉ダルマだ。くそ、羨ましい。

俺はフィーレさんの方を少し刺々しさを込めて見てみる。その筋肉の鎧を嫌と言うほど見せつけている男は、困ったようにキョロキョロした。

強面な人のそんな様子が面白くて、俺は必死で笑いを噛み殺した。

そしてエルルカは魔女っぽい格好だとは思っていたが案の定魔女だったようだ。

「ゴホン、それでは泉殿には現状の説明を約束通りしなければなりませんね。……一度で全てを教えることは不可能ですからまずは簡単なことから説明しましょう」

そう言ってフィーレさんは手綱を離れた。ってあれ手綱離していいのか！？

驚く俺にフィーレさんは微笑んで言う。

「ああ、大丈夫ですよ。彼らは利口ですから意図を理解してくれています。主よ、私が説明して良いのですね？」

「あー、メンドイからパツパとやってくれ。どうせ説明したところで自分で実感しないと覚えられないだろうけどな」

本当に面倒臭そうに手をヒラヒラとふるババア系少女。

フィーレさんが手綱を置いても馬車を引っ張る馬のような生き物はブレずに走っている。

本当に利口な動物だなあ。誰かとは大違いだ。後で撫で撫でしてこよう、と密かに俺は決意した。

エルルカの体がピクツと揺れる。

「……何か今失礼な空気を感じたぞ」

「気のせい気のせい。それじゃ、フィーレさん、よろしくお願いします」

魔女の視線を避けるように俺はフィーレさんの方に体を向けた。

「はい、それでは説明させていただきます。まずこの世界の話をしなけ

ればなりませんね。この世界は通称銀世界、もしくは銀大陸と呼ばれています。人間は第一世界とも呼びますね。人、精霊、魔物が共存する世界です。

五大国、我々が今いる白の国、黒の国、赤の国、青の国、黄の国、それと無数の小国によって成り立っています。ちなみ我々が今向かっているのは紫の国というところです。」

ふむふむ、銀世界って雪でいっぱいなのやつみたいだな。しかしやっぱりというべきか精霊とか魔物とかいるのか。……ちよつとワクワクする。

それと国名が色というのはこちらでは普通のことなのか。まあ覚えやすくっていいか。

「続けます。今第一世界と申し上げましたが、無論第二世界、第三世界もあります。

第二世界は通称金世界、神、精霊、魔物の世界で召喚された者は基本的にここ出身です。私の故郷もここになります。

そして第三世界、これは銀、金世界以外の雑多な世界で、泉殿の故郷もここ何処かでしょう」

「雑多な世界の1つか、俺のふるさと……」

雑多な世界の1つ扱いはちょっと哀しい。まあ確かに碌でも無いところではあつたけれど。

神様のいる世界が第二世界っていうのも人間の傲慢ここに極まれりって感じた。

「ところで泉殿は魔術を使えますか」

「魔術？ とんでもない。俺は一般人ですよ。魔法とか魔術とか、俺のいたとこじゃ物語のなかでしか存在しないものです」

「ふむ、なるほど。泉殿の世界では魔法は架空の存在と。もしかし

たら第三世界外からの召喚もあり得ますね」

フィーレさんは少しだけ考え込むような素振りをして一息つく。

「魔法とは、霊血、すなわち行使者の魔力を供物に、界血、すなわち大地に満ちている魔力に働きかけ事象を操る神秘術の総称である。」。これがこの世界での魔法の定義となっていますが、この説明で理解できますか？」

「うーん、MP消費してファイヤーするってことかな。なんとなく大丈夫です。」

「それはよかった。魔法の中で人が主に使うものを魔術、精霊が使うものを精霊法などといって区別しますがそれは今はいいでしょう。」

今聞いた区分けによれば、先ほどエルル力が出していた大きな顔の化け物は魔術に含まれるらしい。

正俺の考えていた魔術とか魔法とか言うものとは全く違っておどろおどろしいものだったが。

「さて、ここまでで何か質問は？」

そう言つてフィーレ先生は一旦話を止める。

エルル力の方を見ると、行儀悪く寝そべっている。いつの間にかまた瓶からキノコを出して食べていた。

その図はさながら、通販番組を見ながら煎餅を食べるおばはん。キノコに集中していた少女が俺の方を向くと、俺は慌てて顔を逸した。考えていることがあれば何されるか解らない。

何せ、でかい顔の化け物を出してくるのだ。

俺は思いついた質問を取り敢えず口にすることにした。

「んと、まず俺はその魔法によつてこちらに来てしまつたんですか？」

「恐らくそうだ、としか今は言えません。あなたが召喚者を殺してない以上、召喚者がいないなどと言つたことはあり得ないのですが。……そうだ泉殿、召喚者に心当たりはありませんか」

そんなこと言われてもなあ。少なくとも俺の知り合いに魔法使はいはなかったし。いつもの夢から突然別の夢に変わっていただけだし。

俺はクビを振つて解らないということを伝える。

「……そうですか。しかし泉殿が召喚されたことは召喚魔術と必ず関係があるはずです。召喚魔術は別名界魔術といつて霊血を媒介に界血を供物として捧げ、異世界から生物を呼び寄せ使役する特殊魔術です。

その成り立ちから正確には魔法とは異なるものなのですが、一応魔法の一種として数えられています。

他にも特殊な魔法はいくつかありますがおいおいそこは教えていくこととしましょう」

意味不明すぎて頭が破裂しそうだ。魔法なんだか魔法じゃないかはつきりして欲しい。

俺は後頭部を掻きながら、何か聞きたいことはないか考える。

ん、そついや、俺が召喚術師として才能があるつてさっき言つてたな。ということは……

「もしかして俺、魔法使えるんですか!？」

「魔法は修練さえこなせば基本的に誰でも使えますよ。もっとも才

能も重要ですが」

「ほ、本当ですか。ま、魔法使いになれるのか……」

俺が嬉しさの余り立ち上がると、向かいのエルルカが冷たい眼で俺を見た。

煩いぞ。静かにしろ。

何も言わずとも雄弁な表情から彼女のそんな気持ちを読み取り、俺は小さくなつて座り込む。

「才能といえば、泉殿には召喚術師の稀有な才能があるとお見受けします。召喚術そのものは複雑ではないので後にでもエルルカ様にお聞きすると良いでしょう。」

きつと役に立つはずでしょう」

「コイツに聞くんですか。嫌だなー……」

最後の一言はなるべく小さい声で言う。ちょっと怒られることも期待して言ってみたがエルルカは話がつまらないのか全く会話に入つてこない。

本当に猫みたいなヤツだ。

そういえば、この世界に来てからもう半日以上経っているけど、俺何も忘れてないな。何度か二人にも触っちゃったけど、記憶の読み取りも無い。

まあ、触れば必ず記憶を見るってわけじゃないから安心はできないけれど

「何か気になることがあるのですか？」

俺の頭の中を読んだのかフィーレさんが言う。

自己完結するのは悪い癖だ、聞いてみた方がいいかも知れない。俺は思っていたことを口に出した。

「ちょっと気になることがあるんですが、この世界には病気はありますか？」

「……風邪やら何やらのことか？ 無論あるぞ」

ずっと黙っていたエルルカが口を開いた。

「いや、そっちじゃなくて、なんというかえーと」

「さっきから煮え切らんやつだな。男ならなんでもシャキつと言わんかシャキツと」

「むむ、実は俺の世界でもよく解っていなかった病気なんだ。ほとんどの人がかかっていたんだけど誰一人助かってない」

「……ずいぶん剣呑な話だ。お前もかかっているのか」

「うん、俺もかかってるよ。でもまあ調子いいみたいだし大丈夫かな」

別に体の調子に直接支障を来す病気では無いが、何となく俺は肩を回してみる。

「それは伝染性のものなのですか？治療術を行った方がよいのでは」
心配そうな声色のフィーレさん。

「あー、それは大丈夫ですよ。病気って言ってもウイルスとかそういうの原因じゃないからこれは伝染らない」

「ういるす？何だソイツは。しかし症状が出てはマズイではないか。どのような症状なのだソレは」

「この病気一人ひとり症状違うんだけど、確か俺は記憶感応症だったっけかな」

「記憶感応症……？どういった病気だ」

「うーんと、口で言うのメンドクサイんだけど人の記憶を自分のものにしちゃう病気かな」

「……そんな病気、聞いたことがありません。では我々の記憶も読み取れるのですか？」

「へ？どうだろう。自分の意思とか関係ないから入っちゃったことあるかも知れないです。あ、迷惑ですよ、すみません」

「いえ、構わないのですが……」

どう声をかけようか、とでも言いたげなフィーレさんはきつととても優しい人、いや精霊なんだろう。

そういえば、と先ほどを思い出す。俺の頭に乗せられたフィーレさんの手。人にああいうふうに触られるのは久しぶりだった。

トウノも偶に俺のことを突っついたり揶揄したりしてたけれど、最近俺が大きくなってきたせいとその頻度も減っている。

あれ？ でも俺、トウノの記憶を見たこと無い。家にいないことが多いとは言え、そんなことってあるのか？

「ふん、お前の記憶が読みにくいのはその変な病気とやらのせいかな」

「主よ！」

「ふへ？」

体を起こして偉そうにエルルカは言った。フィーレさんは珍しくはつきりと怒気を見せている。

記憶を読む魔法、いやエルルカは人っぽいからこの場合魔術か。魔術はそんなことできるのだろうか。

「お前が暢気に寝ている間に記憶を調べさせて貰ったぞ。幼いときの僅かな記憶以外は断片ばかりで意味不明だったが、その病気のせいか」

「ああ多分そうだよ。色んな人の記憶が頭に突然入ってくるせいで、物忘れが激しいから俺」

昔、一度にたくさんの人の記憶が頭に流れこんできて以来、俺は中途半端に記憶を喪失するようになった。

中途半端、というのははつきりと1つもモノ、例えば『林檎』だとかそういう事柄を俺は忘れてしまう訳ではない。

アップルパイに入っているのは『林檎』、という事実があるとして、その中における『林檎』を忘れてしまうのだ。

つまり、アップルパイに入っているのは何だっけ？　みたいな感じ。トウノについては覚えていてどんな奴かも、一体いつごろ帰ってくるとかそういうのははつきり覚えているのに、

ただそいつが養育者である、ということだけを忘れてしまうことがあるように。

極端に断片的だから、類推すれば結局、完成された記憶を作り直せるのだが

いつも無意識のうちに記憶が滑り落ちてしまうので、一体何を忘れていたのか俺は自分ですらわからない。

エルルカが言っている俺の記憶が読みにくいっていうのはそういうところから来ているのでは無いだろうか。

「今は症状は出ていないのですか」

「うーん。たまたま落ち着いているだけかも知れないけど今のところ大丈夫ですよ」

「ふん、因果律に引きずられたせいで回復したのかも知れんな」

「そっいえば因果律ってさっき言ってたね。ソレ何？　エルルカ」

ふんぞり返って話しているエルルカに尋ねる。

「……オイ、そういえばどうして私にはタメ口なんだ、お前より十倍は年上だぞ」

「いーじゃん、別に。見た目子供なんだし」

「ぬおお……、ここまでの無礼狼藉、何十年ぶりだ……」

「……主よ、住んでいた世界が違うのです。致し方ありません。しかし因果律は間違いなく変わっているのですか？」

「チッ、教育は後か。仕方ない。……因果律の変更は間違いないぞ。界魔術行使の痕跡がしっかりと残っているからな」

「どゆこと？」

「つまり、お前は年もとらんし、メシもいらんし、糞も出ない、霞食って生きていけるってことさ」

「……え？」

「我々使い魔と同様になったということです、泉殿」

「ええー!!」

なんてこつたい。ご飯も食べられないし、毎朝の快便タイムも楽しめないだなんて！永遠の少年とかピーターンじゃあるまいし。

驚いて固まる俺にエルルカは慰めるように言った。

「別に良いではないか。案外楽なもんだぞ。食費もかからんしな」

「んん？エルルカもそうなの？」

「わ、私か。えー、いや、私のことはどうでもいいだろう!」

突然ギャーギャー怒り出す大天才様。良く考えたらこいつは怒ってばかりだ。

まるでトウノと一緒にのときの俺のように。

「……主は、界魔術の実験に失敗して因果律が捻じ曲がったのですよ」

「戯け！勝手に言うな！」

「彼の過去を勝手に覗きみたんです。ご自分の過去が明かされることくらい当然でしょう」

「ぐぬぬ……、言うではないか筋肉馬鹿……」

悔しそうにプルプルしているエルルカ。その振動につられて頭の帽子の鈴がリンリン鳴って可愛いらしい。

しかし年を取らないって不老になるってことか。

異世界に召喚されて不老になって謎の能力ゲットって、よく考えたら結構運いいんじゃないだろうか。

「それじゃエルルカは見た目通りの年じゃないってことか。一体何歳なんだお前。年寄り臭い話し方だけど」

「……聞いて驚け、163歳だ」

「263歳の間違いでしょう、主よ」

「に、にひやく……！？」

「ふん、100歳も200歳も大して変わらん、私が大天才かつ超美少女なのは周知のことだしな！」

なんだかよくわからない理論をエルルカは振りかざしている。

しかし見た目通りの年齢ではないんじゃないかとは思っていたけどここまでとは。

因果律とやらの効果が無ければヨボヨボもいいとこだな、コイツ。見た目はどうあれ、やっぱりババ……

「おい、それ以上、余計なこと考えたら生きたまま燃やすぞ」

年齢なんて関係ないよね！可愛い正義！

「・・・因果律の変更は成長期の泉殿には辛いことでしょうか、どうか気を強く持ってください」

いかにもお劳しい、と言いたいような眼でフィーレさんは俺を見る。ん？成長期の俺に辛い？……それってもしかして、

「うははははは、私と一緒に、お前もずっとガキのままだ！良かったなイズミ！ざまあ見る！」

エルル力は腹を抱えて馬鹿笑いしている。く、このガキ人事だと思つて！

「う、嘘、じゃあ俺もう身長……」

「はい、伸びません」

「筋肉は……」

「基本的に身体能力も一切変わりません」

「そ、そんなあ」

余りのショックに俺は頂垂れた。

ただでさえ小さくて細くてへなちよこなのに、これ以上大きくならないというのはかなり苦しい現実。

いつか、トウノよりも30センチくらいでかくなって踏みつぶしてやるのが夢だったのに。

なるべく俺の顔を見ないようにしてフィーレさんが話を切り替える。

「さて、こんなものでしょうか。魔術に関してより詳しい話は私よりも主にお聞きくださった方が良いでしょう」

「あ、はい、ありがとうございます」

フィーレさんは優しく笑っている。真顔だと精悍で鋭い印象だけど笑うと少し子供っぽい。

そういえば俺、お礼をまだちゃんと言っていないな。

二人は自分の国を捨てて俺を助けてくれているのに。

お礼、言わなきゃ。

「あの、二人共、本当にありがとうございます。今更だけど国を……」

「ふん、そこまでしておけ。礼を言われる筋合いはない。やりたかったからやってるだけだ」

無然とした表情で切り捨てるエルルカ。だけど本当にこの子が怒ってるはずない、なんて俺は勝手に思った。

「でも……。あ、エルルカ、中々言えなくて悪かったけれど、あの時俺を助けてくれてありがとう」

「む？ああ、墜落していたお前を助けてやったことか。子供は気にするな。大人として当然だからな」

「……それでもだよ。ありがとう」

「ふん、受け取っておいてやる。私は心が広いからな。」

いいか、お前は精々堂々と私の厚情を感謝して受け取っていればいいんだ。

どうせ私も無駄に年を取って暇していたところだ。年を取るとな、面倒事は中々に刺激的で面白いのさ」

ニヤリ、と不敵に笑う金色の少女。隣で瞑目して微笑む赤色の偉丈夫。

どうして、この人達は自分の居場所を捨ててまで俺を助けてくれるんだろう。

ずっとさつきから胸に引っかかっている疑問。だけれど俺はそれを結局口にすることはできなかった。

知らなくても幸せなら、知らないままでいい。俺はそれで充分だと思っ

「そうだ！おいフィーレ、酒を出せ。これからしばらくは一緒にいるんだ。家族が一人増える祝杯を上げてやろう」

「家族……？」

「どうせお前は这个世界では天涯孤独なんだ。だから私たちがお前の仮初の家族になってやろうというんだ。

ほら、だからさつきと私を崇めよ。私には敬語を使え！今すぐだ」

居丈高にそう言うエルルカの顔が余りに眩しくて俺は少しだけ眼を細めた。狭い視界は滲んでいる。

一度眼を瞑って、それからもう一度彼女たちを見た。

この世界での俺の大切な家族を、忘れないよう眼にしっかりと焼き付けるために。

もう一度眼を開けたときに見えたのは、相変わらず偉そうにふんぞり返っている心優しい魔女と、やれやれとばかりに溜息を吐きながら鞆からあの小さな樽を取り出す火の精霊だった。

魔女と使い魔？（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

少年は少女と出会う（前書き）

1 / 13 改訂とりあえず終了。若干納得行かないですが取り敢えずこれで今ある全話改訂終了。なるべく早く最新話上げます。

少年は少女と出会う

ガタン、ドタン。

幌馬車は結構な振動の中順調に進んでいる。

時刻はそろそろ夕方な頃合いだろうか。

この世界にはどうやら時計は無く、割りとみんな適当な時間感覚を持って生活しているらしい。

日が登れば起きて、日が沈めば寝る。

ちなみにエルル力達は寝る必要がないので、気が向くままに寝起きしているようだ。

全くこいつは適当な女の子だ、と思い、横目で見てみる。

しかし良く考えれば、俺も今ではそんなそんな生活が出来るのだ。

ゴトツ、ゴトゴトツ。

揺れが相変わらず激しい。

向かいのエルル力はキセルを吸いながら何やら難しい顔して本を読んでいる。

せっかく家族になったんだからもつと話したっていいだろうに。

フィーレさんはフィーレさんで御者台から戻ってくる気配はない。

ガタン、ドゴオ。

それにしてもすごい。というかもう無理だ、我慢出来そうもない。二人への感謝とこれは関係ないと思う。無理なものは無理。

「エルル力」

読書の邪魔をされたのが気に食わないのか不機嫌な顔でエルルカはこちらを向く。

「ケツ痛い」

「……知るか。我慢しろ」

駄目だ。取り付く島もない。不機嫌な魔女はそのまま読みさしの本に戻った。

しょうがない、フィーレさんにお尻に敷くような物を頼もうか、と思いをかけようとするエルルカがはつとしたような顔でまた俺の方を向く。

「お、そうだ、いいこと思いついたぞ。イズミ、お前ケツ出せ」

「はぁ！？何言ってるんだよ！？」

何をぬかしますか、このロリババア！

御者台にいるフィーレさんも、一体何に反応したのかビクツと揺れた。

「ケツを撫でてやろう、くけけ」

「結構です！というかお前、いい歳なんだろう、そんなこと言ってるかしくないのか！」

「これは年を取ってるから許されるのだ！何だ、私のような美少女にケツ撫でられることの何が不満だ！」

「まず態度が気に食わない！それと俺はもっと、なんというか柔らかい感じの大人の女の人が好きなんだよ。お前は守備範囲じゃない！」

「つくづく無礼なヤツだお前は！ふん、まあいい、ならばケツはしばらく我慢しているんだな。」

なあに使い物にならなくなったところでもう糞する必要は無いんだ、構わんじやないか、フハハハハ！

……ん？いや待てよ」

ビタツと急にエルルカが高笑いを止める。そして顎に手を当て、暫し思案顔した後に

「ふむ、フィーレ、お前コイツのケツ使うか？」

「「いいかげんにしろ（してください）！！！」」

さっきまでのエルルカの評価は全部マイナスに取り替えた！

少しでも良いヤツだなんて思っていた俺が間違っていた。

こいつはどうしようもなく下品で性格の悪いロリババアだ、いつかギャフンと言わせてやる。

「泉殿も暇なら、魔術のことを尋ねるなりすることあるでしょう！尻が痛いなど男子なら言うべきではありません！」

フィーレさんがこちらをまさに烈火のような瞳で睨んで言った。

な、なんで俺も怒られるんだ！

エルルカはざまあ見ろ、と言わんばかりに俺を見ている。抗議したいが、男子が言うことではない、と男らしい男に言われれば何も言い返せない。

泣く泣く諦めて俺はエルルカに魔術のことを訊ねることにした。

「じゃあエルルカ、魔術教えてくれよ。こうマッチョになる感じの」

「無いわ、アホ」

「じゃ、じゃあ身長伸ばす魔術は？」

「おお、借体法なら知っているぞ。まあお前の霊血の量じゃまず無理だな」

シャクタイホウ？何だかわからんが、霊血って確かMPのことだったはずだ。

そっぴや俺のMPってどのくらいあるんだろう。

「その霊血？ってヤツ俺どのくらいあるんだ？」

「どのくらい、と言われても数値化できるワケじゃないからなあ。どれ、少ししっかりと調べてみるか」

ボタンと分厚い本を閉じ、エルル力はチョコンと俺の隣に座った。

ち、近い。いやいや待て待て。こいつはどう見ても小学生サイズのちびっ子だ。恥ずかしがる必要なんて無いんだ。ドーンと構えていようドーンと。

「……なんだあ坊や、顔が赤いぞ？フフン、欲情してしまったのかあ？」

「煩い！さっさとやるならやってくれ」

「……つまらんのう。ほい、それじゃ失礼」

そう言っ額を俺の肩にくっつけてくるエルル力。

「お、おい、ちか……」

「静かに」

エルル力の帽子の一部に変な模様が青白く浮かび上がる。

円形でゴチャゴチャして解りにくいけど、これがもしかして魔方陣ってやつだろうか。

「ついでだ、説明しておこう。基本的に魔術においては呪文よりも

魔方阵の方が効率が良いものとされていてな。

ほとんどの魔術を使う者は普段からよく使う術式を陣化して身体や衣服に書き込んでいるのだ。

こうしておけばいつでも使いたいときに魔力を込めるだけで使えるからな。詠唱する時間もいらん」

俺の疑問に答えるようにエルルカが言った。なるほど、それは確かに便利だ。

エルルカが帽子を取らないのはそういう事情があるらしい。ん、ああハゲを隠してい

「察しの通りこの帽子には私の研究成果が大量に書いてある。決してハゲを隠しているわけではない」

るわけではないらしい。

「よし、いいぞ。わかった」

「おお！で、どうだった？やっぱり異世界補正ですごい魔力持つてるんだろ俺」

「……」

あれ？エルルカの俺を見る眼が少し生温かい。

「えー、簡潔に言おう」

「うんうん！」

「やっぱりお前魔力全然無いな。これじゃまともに魔術使えんぞ」

へ？嘘？

異世界じゃ俺の人生イージーモードの予定だったのにどうして。自分が特別だというつもりは無いが、セオリー通りではないことに

俺は首を垂れた。

「まあ全く使えんという訳でもないんだ、気を落とすな。一発くらい人殺せるくらいの魔力弾はぶっ放せるぞ」

「そんなのはいらないよ！空飛んだり、瞬間移動したりできないの俺！？」

「あのなあ……。まず誤解を解くために言うが、最初に私がやっていた飛翔術は超高度な魔術でほとんどの者ができん。というか私でさえ15分程が限界だし大して速度は出ない。

それと瞬間移動についてだが、これは先程話した界魔術に含まれている。しかし、自分自身への界魔術の方法は疾うの昔に失われているし、他者に界魔術をかけるのも、契約を行った者相手に限られている」

「意味わからん！日本語で話せ！」

「なんだその二本五とは！二本なのか五本なのかはつきりせい！」

あれ？そついや言葉ってどうなってるんだ。エルルカが日本語という言葉を理解できなかったことを俺は不思議に思った。

どう見てもフィーレさんもこのババアも日本人じゃないのになんで日本語を喋っているんだ？

「そついえば、言葉って……」

「ああ、お前は因果律がこつちの世界のモノに曲げられているからな。言語は勝手に変換されているはずだ。

向こつの世界で読み書きがきちんとできていたなら文字も大丈夫だろうつよ」

そう言つてエルルカは先程まで読んでいた本の表紙を指さして俺に見せる。

んー、なになに。『第三世界への召還法についての考察』

おお、読める読める。便利だ因果律。身長伸ばしてくれれば言うことないというのに。

「おお読める読める。　　んで、魔術は俺には無理なのかよ」

「……いや、方法はきちんとある」

「なんだよ、あるなら勿体ぶらずに言えよ、エルルえもん」

「んあ？お前は時折わけわからんな。というかいつともわけわからん。　ほれ、これをやろう」

エルル力は帽子の中に手をつ込んで一冊の本を出して俺に手渡す。何度も見た光景だけど、俺は突っ込むことを我慢した。

「なんだこれ？」

「魔術道具ってヤツだ。元々は魔術の使えない貴族のために作られた召喚魔術の補助道具だな」

あ、そういや俺召喚魔術の特性あるだか何やら言ってたっけ。

分厚くて殴られたら痛そうな本には小難しそうな文章がババーツと書いてある。

なになに、血、痛覚、夜、月、右手、羊……？

小難しいというか、ひたすら単語が羅列してあるだけ？

俺が首を捻っていると、エルルえもんは誇らしげに言い始めた。

「お前は魔物やら精霊の好む魔力色をしているようだからな。こいつを使って召喚獣でも使役して身を守るのが安全だろう」

「なんだよこれ。単語帳か何かか？文章意味わかんないけど」

「ああ、それも一種の魔方陣だ。規則的に呪語を書いて一定の効果を發揮するようにする。お望みなら法則とか公式やらいろいろ講義してやるが、聞くか？」

「……いいえ、結構です」

結構分厚い本を改めて見て、その途方もないであろう作業を想像して辟易する。

「ま、お前には一億年かかっても無理だろうな。これは魔女の秘術というヤツを用いているからな」

「ん、そういやエルル力って魔女なんでしょ？魔女と魔術師って何か違うの？」

「ふむ、まあ別にそう大きな違いがあるわけではない。

魔女は魔女の掟というモノを持ちそれを守り続けているっただけだ。

まあ使う魔術の方向性も若干違うが、似たようなことを研究している魔術師もいるしな。

ただし魔女の秘術そのものは掟を守り続けている者でしか使えぬ。だから気がつけば伝承者は私一人になってしまっていた」

「掟？」

「ああ、例えば女であること、処女であること」
「ブフォッ！」

「しょ、しょ、しょ、しょ、処女って！！」

女の子がそんなこと自分から言うってどうなんだ！

俺は思わず咳き込んだ。

「き、汚いぞ、唾がかかったではないか！あーあ、これで純潔が失われたかも知れぬな、責任取ってくれるのかイズミ？」

妖しく笑いながら身体を密着させてくるエルル力。

くっ、完全にこいつ俺で遊んでやがる。

エルル力はしばらく子猫のようにくっついていたが、急にパツと身体を離れた。

さつきまで暖かかったところが急にヒンヤリして少しだけ淋しい。
エルル力は顔を真っ赤にしている。

自分でやっておいて何で恥ずかしがっているんだコイツ。こっちの方が恥ずかしくなるわ！

「ま、まあ、モノは試しと言うし召喚術使ってみてはどうだイズミ」
「へ？そんな簡単に使えるの？」

「そりゃあ、勉強したくない貴族のために作った品だぞ。お前みたいなアホでも使える」

エルル力は如何にも挑発しています、とでも言いたいような顔つきで目を細めている。

ぬおー！このちびっ子は言わせておけば！

しかし、せっかくの魔術を使えるチャンスだ。ここでコイツの臍を曲げさせるのは得策ではない。

黙って従っておこう。

エルル力は俺の悔しそうな顔が満更でもないのか、やっと本調子で喋り始めた。

「いいか、まず本を開け。ページはどこでもいい。好きなところだ」
言われる通りに適当なページを開く。

「で、霊血を捧げろ」

よしっ、父さん捧げちゃうぞー。……ってどうやるんだ？

「あの一、エルル力さん？」

「なんだ、さつさとしろ」

「どうやって捧げるんすか？」

「あ……」

ぽかんと口をエルル力は開く。

こいつすっかり俺が魔法なんかと関わったことが無いの忘れてやがったな。ドジっ子魔女め。

「あー、そうさな、こうドバっと出す感じではなく、チョロっとな」

「ふんふん」

「まあ慣れたらなんとかなるぞ、ハハハ……」

「できるかー！！！！」

なんてこった。後ちよつとで夢の魔法使いになれるっていうのにこんな巨大な壁があったなんて。

こいつは教えるということに関しては全く才能が無いらしい。どこかに教えるのが上手な素敵な人はいないか。

……っっていた。

さつきから御者台で黙って座っているイケメン筋肉様がいるじゃないか。

「エルル力、フィーレさんも霊血の捧げ方わかる？」

「ああ、もちろん。しかしアイツに聞くのか？止めておいた方がいいぞ」

「お前よりマシだよ！　フィーレさん、ちよつといいですか？」

又ツと振り向くツンツン赤髪の青年。

あれ？なんか眼座ってない？

「……お話は大体理解できています。覚悟はいいですか泉殿」

「か、覚悟……？　いや、俺は魔法使いたいです！だからお願いします！」

「そうですか。覚悟ができているのであればこのフィーレ、心を鬼にしましょう。」

「それでは眼を閉じてください」

言われるままに眼を閉じる。つか心を鬼にしなくちゃできないのか？やばい、一体何されるんだ。

鼓動が激しくなる。

フィーレさんの手だろうか、おでこにヒンヤリした何かが当てられる。

「失礼します。 剣を持て、槍を立てよ」

ん？今何か言ってるん？

「ガッ！ーう、うわ、なんだこれ！？身体が……」

「私の霊血を無理やり流し込んだのです。 私の魔力色は太古の炎。少々熱いでしょうが我慢してください」

爪先から、指の先まで一本の熱い鉄の管を通されたような感触。

熱い、なんてもんじゃない。全身がただ痛い。

というかもう痛いんだか痛くないんだかわからなくなっている。

視界は涙のせいかボヤけていてエルルカもフィーレさんも見えない。

痛い。

なんだ、これは。

いや、この感覚は知っている。まるで人の記憶を、見ているときのような。

頭に、思いつき殴られたような衝撃が来る。

それをは案の定、と言つべきか、なんというか。
俺は誰かの記憶の世界に突き放されたのだった。

放り込まれた世界はぐるぐると黒い雲が渦巻いている。

真っ黒なそれはまるで、テレビで見たマグマのようだった。

これは歴史だ。

フィーレさんの記憶？

いや違う。

大地の見た太古の記憶。

殺し、殺され、汚し、汚される。

哀しみの記憶。

武器を取る若者。

犯される女。

親を失う子供。

たくさん悲劇。どこにでもあるそんな悲劇。

この世界もそんな悲劇に満ち溢れている。どこに行ったって同じ、つまらない世界。

たくさん風景が過ぎ去ってゆく。

たくさん、戦いがあった。

一体、何を求めればここまで人は血を流せるのだろうか。

人を憎み、嫉み、殺し合えるのだろうか。

俺の視界は鳥のそののように、街を見下ろし、山を越え、やがて枯れ果てた原っぱにたどり着いた。

そこには、身体中の肉が裂かれ、髪は抜け落ち　　ああ、今落ちたのは内臓だろうか。

汚れてボロボロの一人の人間がいた。

ああ、あれはきつと女の子だ。

俺は何となくそう思った。

最早人とは呼べない姿で真っ直ぐに立っている。

どれだけの悪意を受ければこんなにも傷付くのだろう。

俺は身体を駆け巡る痛みに耐えながら、彼女を見ようと懸命に眼を凝らす。

ふと、誰かに呼ばれたかのように彼女はこちらを向いた。

あれ？　なあんだ、全然傷ついていないじゃないか。

俺は安堵して、心配しすぎた自分を恥じた。だって、あんなにも綺麗な笑顔をしてる。

もっと傍に行きたくて、その頬に、泥に塗れた頬に、触れたくて。だから、俺も、あの子の名前を呼ぼうとした。

「そろそろ良いのではないか、フィーレ」

「そのようです。それではもう一度失礼します、泉殿。　　剣は鞘に、槍は武器庫に」

二人の家族の声が暗い世界に響く。

急激に鉄の管を引き抜かれる感覚。しかし出口は狭く少しずつしかソレは流れない。

しかしその少しずつのソレはとも多くて。

あ、これって。さっきエルル力が言ってた靈血の。

視界が戻ってゆく。眼に流れこむ水滴。うわっ、全身汗まみれだ。頭もガンガンする。これは一気に記憶を見すぎてパンクしているからだろう。

しかし記憶を見た後はいつも不安で押し潰されそうになるのに不思議

議と心は落ち着いている。

あんなにも暗くて、悲しくて寂しい世界にいたというのに。

彼女の笑顔がとても綺麗だったから？

「よく耐えました。熱く苦しかったでしょう、泉殿。感覚はわかりましたか」

フィーレさんの震えた声。つて泣いてる！？ イケメン筋肉が泣いている！？

余りのショックに俺は全身に残る痛み残り滓を忘れて口をパクパクさせる。

「気にするなイズミ。コイツこんなツラなのに涙もろいんだ、年だる年。」

お前も人のこと言えない年だろうが。まあ、フィーレさんの年は知らないけど。

しかし霊血の出し方は解った。これならイケそうだ。

「……ありがとうフィーレさん。そしてごめんなさい。あなたの記憶を俺、見ちゃったみたいだ。」

フィーレさんはそれを聞いてきょんとしている。

「私の、記憶、ですか？別に気にすることはありませんが。……いえ、それは主には是非黙っていて頂きたい。金のこととなると煩いので」

つて金？

フィーレさんは珍しくウィンクでもするような勢いで、お茶目な表

情を見せた。

「おい、イズミ！洗いざらい吐け！今すぐだ！こいつまた勝手に私の財宝を！」

なんだか勝手に二人は勘違いして盛り上がってる。

うーん、ま、いつか。

あんな悲しい記憶、見られたなんて言ったらいい気持ちしないよね。知らなくたっていいことはある。

俺は不思議な高揚感に満たされていた。それが一体何であるのかは解らないけれど、でも悪い気はしない。

エルルカに再挑戦の意思を伝える。

「あー、取り込み中悪いけど、折角感覚掴めたんだ。もう一回挑戦していい？」

「くそっ！この件については後だフィーレ！今日という今日は許さんぞ！」

それじゃイズミ、さっさといくぞ。これが終わったらフィーレの記憶について吐けよ。」

「わかったわかった。考えておくよ」

「本当にわかったのか貴様？まあよい、じゃあもう一回本を開け。

いいか、先ほど覚えた感覚通りに霊血を捧げる。そうしたら受け取られる感覚があるはずだ。

その後求める召喚獣の姿を思い浮かべる！何、大体で大丈夫だ。お前に見合うモノが上手くいけば呼びかけに応じるだろう」

「うん、おっけー」

よし、いくぞ。大丈夫。

眼をしっかりと開き、開いたページを見つめる。

狭い、門。

そこから兵士たちが列をなして勇壮に進んでゆく。
数は少なくとも、それはとても力強く行進してゆく。

それが俺の掴んだ霊血を捧げるイメージ。

兵士たちは目標の場所にたどり着いたらそこで倒れてゆく。

きっとこれが受け取られる感覚。

そして、俺が喚ぶもの。

あ、どうしよう、全然考えてなかったな。

フィーレさんみたいな戦士、それともドラゴンみたいな力強い生物？
ああ、でも、さっきのあの子に、気高くて、優しいあの子に会えたら

俺の気持ちに反応したように幌馬車が凄まじい勢いで揺れ始めた。

勝手に進んでくれていた馬たちは驚いたのか嘶きをあげてそこで止まる。

手元の本が白く発光し、熱を持ち始めた。柔らかくて温かい、心地よい微熱。

様々な色の光の雫が、狭い馬車の中を飛び回っている。

「おいおい！？ フィーレ、なんだこの魔力量は！？」

「わ、わかりません。しかし、泉殿のものではないようです！」

「こいつ、何喚びやがった！ フィーレ、戦闘の用意しとけ！ 場合によっちゃそのまま召還するぞ！」

「了解しました！」

フィーレさんの手にはいつのまにか幅広の剣が握られている。

筋肉は剣を持っただけでもサマになるなあ。

エルル力は帽子から服まで、果てはその靴まで、全身に青白い魔方阵を浮かび上がらせている。

全く何やってるんだ、二人共。

こんなにも、この光は優しいというのに。

「名前を、あたしの名前を呼んでください」

頭に響き渡る、少女の声。

凜とした、それでいて柳のように靱やかな、高い声。

聞いたことないはずなのに、俺は彼女がそんな声してるだろうって知っていた。

そして彼女の名前を俺はもう知っている。

いや、自然に頭に浮かんできたのだ。当たり前のように、まるで最初からそこにあっただように。

「 来い！ ラプサ！ 」

「ラ、ラ、ラプサだ！？ んな、なななななそんな馬鹿なあああ！！！！」

エルルカの間抜けな声が響く。

彼女の名前を読んだ瞬間、より一層本は輝いて、思わず俺は眼を瞑った。

次第に光は収まり、本が帯びていた熱も大気に逃げてゆく。眼を瞑った向こう先に感じる、柔らかい熱を残して。

俺が眼を開けると、そこにはあの丘の少女がいた。

黒く艶やかな髪は肩で揃えられ、緑色の瞳は宝石のよう。褐色の肌は、上等の絹のように滑らか。

白地に青い水仙のような花が浮かぶ華やかな浴衣のような服は、とても彼女に似合っている。

「綺麗だ……」

そんなこと俺はぼけっと呟いてしまっていた。

「キヤー！ そんなこといきなり言うなんて、ご主人様、ダイタン
！！」

彼女はそんな俺に優しく微笑むのだーって。あれ？

あ、結構、軽いノリなんすね、ラブサちゃん……。

ラブサは呆然としている俺らを尻目に一人で飛び跳ねたり、ニコニコしながら俺を見て、キヤー、と興奮したりしている。

余りにあの記憶の中の神々しさとかけ離れていて俺は脱力してしまった。
った。

エルルカは口をあんぐり開けてふらふらと頭が覚束ない。

フィーレさんは、なぜか、その場に跪いている。

一体何だっと言うんだ全く。

召喚術のせいなのか、どうにも力が戻らない身体を落ち着かせ、エルルカが現実に戻ってくるまで俺は待つことにした。

少年は少女と出会う（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

城塞將軍と女王の懷刀（前書き）

1 / 1 1 大改訂。グスタフ&レドウスの会話の辺りを中心に。

城塞將軍と女王の懷刀

「女王の犬はどうしている？」

「街道を走るエルルカ」フィンの馬車の目撃情報が幾つも拳がつているのにも関わらず、まだ彼女らを見つけていない、とのことだ」

「……見え透いた時間稼ぎだ。くだらん。女王は何も言っていないのか」

「女王はリラ」メイストを気に入っていますからな。見て見ぬふりをしているのかと」

アレほどの大規模な界魔術行使を情によって見逃すつもりなのか。なんと情けない。

深緑の布地に金の刺繍が入った貴族服の男はこめかみを押さえた。

「全くもってくだらん。愚かな女共だ。それでは国軍への下知も無いだろう。目撃情報の詳細をどうなっている」

「はい、エルルカが目をかけている村からの密告では、彼女の馬車は街道を南に進んでいるようです」

「ふん、あのお人好しの魔女のことだ、まさか息のかかった者から密告されているなどとは思うまい」

「恐らくは。しかし、エルルカは赤の国に亡命するつもりなのでしょうか？ あの街道を通ると我が王都の通過は確実です」

青白い顔の男は媚びた表情で正面の男を窺う。

「いや、それは無いな。あの女はそもそも五大国を嫌っている。その世話にわざわざ自分からなりには行かんだろう。」

タイミングは知らんが必ず何処かで動きがあるはずだ。

目的地はギルドの権力が強い紫の国か、ヤツの故郷の原始の大森林

か。 どちらにせよ本来は北に行きたいはずだ」

貴族服の男は本当につまらなさそうに、首に輝く竜を模したペンダントを弄びながら、目の前の男を一瞥して言った。

「悪い癖だ、レドウス」

「申し訳ありません、レイアル卿。しかし本当に卿のご慧眼には驚かされてばかりです」

「何を言う、本当は貴様も同じ予想を立てていたのであろう？」

いいか、もう一度言うがこの私を試してくれるな。貴様の首など私にとっては羽虫を潰すのと変わらんぞ」

「おお、それは怖い。気をつけましょう」

無表情におどける男に苛立ちを隠せずにグスタフ「レイアルは革張りの椅子から立ち上がった。

「議会の老人共は何をしているのだ」

「事件発生当時は、いろいろと動いていたようですが、今は全く」

「 籠絡されたともいうのか、あの狸どもが」

「……王宮魔術師は現状傍観しています。もしもそうならば教会の連中の仕業かと」

「ふん、ならばあのお嬢様では無いな。あいつはそんな細かいことをできる女ではない」

「やはり、副団長が動いたのでしょうか」

グスタフは黙り込む。元々副団長は議会から推薦された男。だが任官以降議会派らしい動きは全くしてこなかった。

加えてその推薦にエルル力が噛んでいることは当時から噂されている話だ。

今回の事件で動いていても全くおかしくはない。

しかしあの男にそのようなことができるのか？ 腕は間違いなく立つが、元奴隷のあの男に……？

グスタフの考えは貴族として当然のことだった。

奴隷は単なる商品だ。自分の意思で移動も認められず、奴隷同士の結婚には主人の許可が必要。

近年は農業奴隷 いわゆる農奴の立場は改善され、多少は自由になったと聞くが、それでも奴隷にまともな教養などあるはずがない。

確かあの男は、どこかの貴族に従軍して戦功を立て軍務への就労を許可されたはずだ。

しかし、副騎士団長の情報は巧妙に隠されており、いかに国軍元帥のグスタフであろうと、それを探るのは容易ではなかった。

教会騎士団は、騎士団とは言うもののその実態は女王の権力装置であり、場合によっては自主的な法行使も認められている。

無闇に内情を調べれば、痛くない腹を返って探られる破目にもなりかねない。

「教会に勘付かれないように副団長ヒュームの動向を探れ。取り敢えずはどの議員と特に懇意にしているか程度で良い」

「どの、議員ですか？」

僅かに血色の悪いレドゥスの表情が動く。

「ああ。エルルカが裏で手を引いていようが、あいつは所詮市井の身。必ずヒュームには協力者がいるはずだ」

「……なるほど。了解しました。他には何か」

「継続して女王周辺も探り続ける。後は、無いな。さっさと行け」

「はい」

くるりと振り返り部屋を出ようとするレドウス。しかしドアの前までピタと立ち止まる。

「ああ、忘れるところでした。魔女の馬車には彼女の使い魔以外に異国の黒髪の少年がいたそうです」

「忘れるところ、か。何が言いたい」

「……恐らくはそれが界魔術に関わっている者かと。殺すよう刺客を仕向けましょうか？」

グスタフその鋭い眼光でレドウスを射止める。

「余計な真似をするな。貴様は私が命ずることのみをすれば良い。

そして、この国に害をなすものを殺すのは私の役目だ。何度も言わせるな。下がれ」

「……はい。それでは失礼します」

汚らしい豚め。

舌打ちをしながら、グスタフ＝レイアルはあの顔色の悪い王宮魔術師を思い出す。

彼を女王に対する間諜として雇ったのは他でもないグスタフではあるが、

何食わぬ顔で表の主、すなわち女王を裏切り続けている男を見ると吐き気がした。

ふん、所詮私も同じ穴の貉か。

自嘲して苦笑する。金で主を鞍替えする男、主を殺そうとする男。性質が悪いのはどう考えても後者だ。首を力なく振る。常時の彼を知っている者ならば

彼の弱気な姿に驚くことだろう。

気を取り直すように立ち上がるとグスタフは練兵場に行くため馬を取りに向かった。

彼は国軍の元帥に任命されてから毎日欠かさず練兵の様子を視察し続けている。

大陸ほぼ中央に位置し、周囲を赤、黄、青という大国に囲まれた白の国は戦が多い。

故に常時徴兵を行なっており、練兵場の規模も他国に比べるとかなり大きい。

その練兵場にいる者はほとんどが生活の苦しい農民。

国のため、家族のため、名誉のため、金のため。

その感情は様々なものではあるだろうが、どんな事情や目的があるうと国のために血を流す者達であることに変わりはない。

そんな彼らと汗をかくのは国軍元帥として、名門たるレイアル家の家長として当然だと彼は信じている。

剛直な彼の気性を畏れる者は多いが、皆彼の愛国心を知っているため彼への信望は非常に篤い。

人呼んで城塞將軍。

数多の防衛戦を経て未だ敗北をを知らぬ、守勢の名将レイアル卿。

かつて国軍に入る際、グスタフは父に尋ねられた。

「グスタフ、お前はなぜ軍などに入るのか。我らが領地は広く税収も多い。何も軍に入らずとも公に尽くす方法はあるだろうに」

「父上、私の夢は、歴史ある女王家と無辜の民を守り、我がレイアル家と同じように誇りある貴族と共に戦い、酒を飲み、明日を語ることにあります。」

父上は以前から、私の夢を尊重したいと仰っていたではありませんか。ならばどうか笑顔でお見送りくださいませぬか」

そう晴れやかに言う息子を見て、父はその人生で最も穏やかな笑みを浮かべ息子を見送った。

レイアル家の家長の証たる竜のペンダントを息子に託して。

……しかし外敵から国を守り続けた男はいつしかその若き日の夢を失っていた。

気がついたときには、もう遅すぎたのだ。

女王という慣習を、その権力の形をただ蒙昧に続けることにしか関心のない王家。

国政をただ権力の小競り合いにしか用いない貴族。

国民が如何に塗炭の苦しみを味わおうとも、それを省みることの無いこの国に巢食う毒蟲。

若き日の夢は、いつの間にか埃に塗れ、数多の栄光も彼にとっては何の意味のないものとなっていた。

女王のために死んでいった自分より若き将官たち。

領地から徴兵され、産まれたばかりの幼子を残し散っていた若き農夫たち。

戦場に彼が望んだ誇りなど最初から無かった。

そこにあるのは絶望、怨嗟、悲嘆、狂気。

彼の鉄の双眸はその全てを焼き付けた。

増えてゆくのは彼らの死によって刻まれた栄光の証。

戦勝の後に知るのは、毎度教会と議会の権力争いの痕。

そして護国の竜の心は揺れ続けた。
グスタフ

一体この国に、王家に、貴族に何の価値があると言っただ。

やっていることはそこらの賊と何が違う。

殺し、奪い続けるだけ。そしてその犠牲になるのはいつも力なき民だ。

「……ならばこそ、私は女王を弑し、貴族共を駆逐し、政を民に渡さねばならん。この身が朽ちる前に」

血が滲むほどに手を握る。数多の戦で剣を握った武骨なその手は、汚れた手。

決して民を救うには能わないような、人殺しの手。

騎士団の権力さえ落ちれば、女王はその守りを失う。魔術師共も我が手中にある。

軟弱な議会の連中など我が精鋭たちを止め得るはずがない。これはかつてない好機だ。

グスタフが居城の渡り廊下を思索しながら歩いているとき、それは起きた。

ズン。

腹の奥底に響き渡るような魔力の蠢き。

魔力の不得手なグスタフでも気がつくほどの界血の移動　すなわち界魔術の行使の痕跡。

「な、なんだ、今は!!」

慌てて駆ける。馬舎は彼のいる場所から近い。
着くや否や大きな声を張り上げる。

「おい！ 誰がいるか!!」

「はっ、ここに!!」

馬舎に常駐している兵士が声を上げる。

「さっさと馬を出せ！ それと今日の視察が中止になったことを秘書官に伝えておけ！ 私はこれから王城に向かう！」

習慣から既にグスタフの馬を準備していた兵士から手綱を奪い取る
や否や、グスタフを駆け始めた。
王城まで飛ばしても半刻はかかる。

「民の血を喰んでその生をなす貴様らは、これすらも見て見ぬ振りを
するつもりか？」

グスタフは忌々しげに、遠くに見える王城の純白の塔を睨み、ギリ
と奥歯が削れるほどに噛み締めた。

「
入りなさい」

ギイ、と音を立てて女王の間の巨大な扉が開かれる。

白の国の王城に相応しい、絢爛な白い大理石作りの大部屋。

水晶細工の蝋燭立てが王座に向かって並んでいる。

その間を私は真っ直ぐ突き進む。

「失礼致します。教会騎士団団長リラ・メイスト、只今参上仕りました」

「忠勤ご苦労です。リラ」

玉座には柔らかく微笑む白の君。彼女が私の忠誠を誓うお方。御年24歳、全てを国に捧げた女性。

「定時の報告に参りました。

王宮魔術師殿から報告のあった界魔術を行使したと思われる者ですが」

「ふふ、見つからないのでしょうか。それならば仕方ありませんね」

「……はっ。畏れながら」

「そのまま搜索を続けなさい。この件はあなた方騎士団に一任します。国軍のことは何も心配いりません。そうそう、あなたの補佐は随分と議会派に好かれているようですね」

「はっ。私には過ぎた部下です」

はうん！ヒュームが褒められてる！！嬉しいなあ……。

にしてもさっきヒュームが書いていた書簡は議会対策のものだったのか。

確かに私の権限を使えば、騎士団を押し留めるのは難しいことではない。

自分で言うのもなんだが私は陛下からの信頼も比較的篤い方だと思うし、いざとなれば自分の首を対価に大体の事件を揉み消せるだろう。

しかし議会派の連中には私の権力は通用しない。

今回の界魔術行使も、実行犯が見つからなければ奴らは王宮魔術師にでもイチャモンをつける気でもいるのだらう。

王宮魔術師は実力はあることは間違いないのに、総数も所属する個人についてもほとんど不明ときている。あらぬ疑惑をかけるのには最高の素材だ。

おまけに界魔術の関係者を私の師であり、国賓扱いのエルル力様が握っている。

議会派の奴らはこの事件に絡みたくて絡みたくてたまらないはずだ。一挙に教会派の権力を落とす大きな好機なのだから。

そんな飢えた狼のような議会派をヒュームがどうやって押し留めているかは気になるけれど、ね。

いい男にはヒミツの1つや2つ必要だもんね。

それに私そういうの聞いたら人に教えたくない性質だから聞かない方がいいのかも。

で、でも結婚したらいいよね。夫婦はヒミツを共有するものなんだしっ！

け、けけけっけっけっけ結婚って、なんていい響き

私が界魔術関連以外の報告事案を伝えていると、不意に後ろが騒がしくなった。

どうやら面談中だ、だの緊急の案件だ、などと言って近衛兵が押し問答しているらしい。

「何ですか、騒々しい。要件ならばそこで言いなさい。騎士団長は私の腹心。気にすることはありません」

陛下が声をあげる。恐らくは議会派の動きについてのことだらう。

「はっ！ご面談中に大変申し訳ありません。国軍元帥グスタフ・レイアル卿が火急にお耳に入れたことがあると、門の外までお越しになっております

グスタフ・レイアル……。

国軍元帥にして名家レイアル家の家長。白の国最高位の軍人にして護国の英雄。

議会派の持つ最強の切り札だ。

「レイアル卿が？……どうしよう、レドウス」

げ、あいついたのか。

玉座の影からぬらりと出てくる青白い顔の男。そいつを私は知っている。

王宮魔術師の中でも特に陛下の信任篤き男、レドウス。

姓が無いのは果たして奴隷階級出身であるからなのか、それとも深い事情があるのかは私には与り知らぬところではあるが、

少なくとも陰湿な二オイの漂うコイツを私は好きにはなれない。

コイツはそれがどのようなものかはわからないが常に自身に何らかの魔術をかけている。

無論それを陛下のお耳に入れたこともある。しかし陛下が仰るには酷い火傷の痕を隠すための魔術であり、他の王宮魔術師も知っていることだという。

使い古された嘘だ。

陛下を疑う訳ではないが、私はどうにもそれを信じることができない。

といっても高名なエルルカ様に師事したのに強化魔術一辺倒の私が王宮魔術師の意見に不満を述べることもできないので、今はこいつの動向に注意をなるべく払うようにしている。

まあ陛下に変な魔術がかけられている様子もないし、無駄な心配だ

とは思いたいのだけれど。

できることならば人を疑うようなことはしたくない。

人の秘密を曝け出すような役職にはついていないけれど、ヒュームが言うように私たちは騎士なのだ。

誰よりも優しく強く。公に尽くす者。

ま、教会騎士は法律に尽くす者なんだけどね。

「火急の報告だと言っている国軍元帥を待たせたとすれば議会派を無闇に刺激することになります。

ここは騎士団長殿に一時退席をお願いして、レイアル卿を招きいれるべきかと」

確かに、議会派を今刺激するのはまずい。

恐らくは昨晚のことについて動かない私たちに痺れを切らし、陛下に掛け合いにきたのだらう。

いかに議会派の切り札と言っても軍人だ。議会に直接訴え出ることはできない。

「ふむ。リラはどう思いますか」

「はい、私もレドウス殿と同意見です、報告事案も全て終わりましたし」

「そうですか。わかりました。あなたもそう言うのならそれが正しいのでしょうか。」

それでは、騎士団長、そなたの変わらぬ忠義に感謝します」

「はっ。勿体なきお言葉。それでは失礼致します」

自らの胸にそつと手を置く陛下。

私の心にあなたの忠誠は、届いています

何百年と連綿と続いた退室の儀礼。

私は深く頭を一度下げ、レドウスに目礼してから下がる。

そいつは血色悪そうな顔を神妙なものにしながら慇懃に頭を下げた。

ん？なんだアレは。

レドウスの左耳には小さなピアスが刺さっている。

ただの装飾品と言えばそうだが、随分と見たことのない色をした金属でできている。

赤茶？いや、そういう色というよりは……そうだ、あれは錆びているんだ。

何で錆びたピアスなんてしているんだアイツ。

うつむ、気になる、気になるけれど今質問するわけにもいかないし。

近衛により扉は放たれていた。結局疑問をそのままに私は陛下の執務室を出た。

甲冑の中は汗ばんでいるが、頬に当たる風が心地よい。

時刻はもう夕刻だ。だいぶ涼しくなっている。

どこかで休んで行こうかな。今戻っても取り立ててする仕事もない。

エルルカ様の件も今は落ち着いている。昨日も余り寝ていないし、ちょっとくらいなら、いいかな。

私は少し早い夕食を取るために城内にある宿舎に一度帰宅することにした。

しかし、このとき私はとんでもない大失敗を犯していたのだった。

陛下の執務室は王宮魔術師による何十もの結界が貼られていて、外界の魔力の捕捉が全くできないということ。

そんなことをすっかり忘れていたのだ。

私がその日の夕刻、陛下との面談中に、昨晩など比ではない巨大な界魔術行使が捕捉されたことを知ったのは、夜深くなってからだった。

城塞將軍と女王の懷刀（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

城塞將軍と女王の懷刀？（前書き）

今回はほとんど改訂が必要無い、はず……。

城塞將軍と女王の懷刀？

「国軍元帥、グスタフ・レイアル、入ります」

カツン、カツンと音を立て、女王の王座に向かう一人の男。白を基調とした豪華な部屋、若いときは憧れていた白の君の執務室は今の彼には何よりも汚いモノに見えた。

1つの巨大な石を刳り貫いて作ったということが真ならば、この部屋1つ売るだけで飢えた村20、30は救えるだろう。恒常的に不作を防ぐための大規模な用水路も備え付けてやれるはずだ。

そんな皮算用をしながら、グスタフは白の君に跪く。

白の国五百年超の歴史の権化。民が神の一族と崇める銀髪の女。彼にとっては最大の敵だ。

「……表をあげなさい、レイアル卿。予定に無い面会ですが用向きはなんですか」

女王は氷のような無表情でグスタフを見る。

如何にも木偶に相応しい顔だ。

急な出向に対する非難を表すために、教えられた表情。

グスタフは女王の眼をしっかりと捉え言う。

「ご宸襟をお騒がせして申し訳ありません。至急お耳に入りたいことが御座います」

女王は黙ってグスタフの瞳を見ている。白の国の王者に相応しい白く透き通るような肌は燭台の炎の揺らめきで赤みを帯びている。その姿は見る者にとっては神々しいものだろう。

「陛下、人払いを致しましょう。多くの者に聞かせて良い話では無いようです」

女王の隣で立っているレドウスが静かに言った。本来であれば女王が面談中に近衛兵がいなくなるなどあり得ない。

しかし、派遣したグスタフでも気が付かない内にそれだけのことをこの男は成し遂げた。

そんな才覚を持つ男が金で簡単に鞍替えすることが、努力の人であるグスタフには理解できなく空恐ろしいものだった。

「善きに計らいなさい」

一瞬、迷ったような表情を見せた後、女王はそう告げた。

レドウスが近衛兵達の方を向くと、彼らは静かに部屋を後にした。グスタフは改めて女王に一礼する。

「お心遣い感謝します。陛下」

「良い、何があった」

「先ほど陛下が騎士団長とご面会なさっている間に、巨大な、未明のものとは比べ物にならないほど巨大な界魔術行使の痕跡がありました」

ビクッ、と体を動かす女王。しかし相変わらずその表情に感情らし

きものは無い。

「ひいては陛下、今回の事件、国軍に下知をくださりませぬか」

グスタフは頭を垂れる。女王は何も答えない。……いや、答えられないのだ。

「騎士団は先の事件の犯人を未だ捕まえていないと聞きます。恐らく今回の事件を追う余力は無いでしょう。しかしそんなことを言って手を拱いていることはあつてはなりません。どうか我々国軍にご命令ください。必ずや陛下と臣民の心を安らげてみせましょう」

女王はグスタフの臣民と言う言葉に若干反応を示した。そして隣の自らの寵臣にその水晶のような眼を向け尋ねる。

「レドウス、あなたは どう思いますか」

「……はっ、畏れながら、元帥閣下の仰る通り騎士団は前回の事件に掛かりきりです。今、この案件を持ち込んでも処理できないでしょう。」

レイアル卿にお任せするのが良いかと

「ふむ。あなたの意見はそうですか。では、騎士団長をこれに」

グスタフは瞳を閉じる。

いつものアレが始まった。

レドウスは部屋の隅から、白木細工のシンプルな造りの箱を取り出し恭しく女王に渡した。

女王はそれを膝の上に置きそつと蓋を開ける。

その中は、女王の執務室がそのままに再現されていた。

瀟洒な燭台も、華美な王座も、そして、小さな女王、騎士団長、王宮魔術師、国軍元帥、議員それぞれを模した人形が箱には入っている。

女王はそのうち騎士団長のものを大切そうに抱きあげて優しく撫で始めた。

これが、五百年の業だ。この国の禁忌。いつから狂ったのか。最初から狂っていたのか。

その芸術品のような顔を幼子のように皺くちやにしながら、小さな騎士団長に諮問する女王。

水晶のような瞳は、どす黒い狂気に染まっている。
その首を今すぐにでも叩き落としたい衝動を必死に抑えながらグスタフは声を上げた。

「陛下。もしも制御不能な化物が召喚されているとしたら臣民に被害が及びます。騎士団が動けない今、臣民を守るのは我々国軍のすべきことかと愚考いたします」

「あ、あ、し、しかし、騎士団長がまだ考えています。暫し待ちなさい」

そう言うときまた人形との会話に女王は没頭する。

建国からおよそ100年後、他国との争い、国内の鎮撫と多忙を極めた女王と騎士団を支えるために議会と国軍が設立された。

当時の主要議員、国軍上層部は共に騎士団出身の者が占めており、功績により爵位を授けられた貴族がほとんどで女王の権力を脅かすようなものではなかったと言われる。

しかし代を重ねるに連れ、武人であったことを誇りにしていた貴族たちは領地の経営に精を出すようになり、その領地経営を援助した

大商人達にも選挙権が渡されることとなった。

一度はつれ始めると、その崩壊は早かった。

かつて女王に忠義を誓い、勇者として名を馳せた者たちの末裔はその剣を錆びつかせ、貴族同士の政治ゲームに興じるようになっていった。

その遊技盤の上では女王ですら駒の1つとしてぞんざいに扱われるようになってゆく。

それを危惧し、権威の失墜を恐れた女王家は王宮魔術師という相談役を設け、その権力を保つことに必死になった。

そして、いつからか明確なことは分らないが、とある自衛策を女王家と魔術師は思いつく。

人工的に狂人を作り出し、王宮魔術師と騎士団長の判断を仰がねば、何も決められない人間を作ればいい。

そうすれば、余計な失言を議員に啄かれる心配も無く、感情に任せた決断もすることが無くなる。

そこで相談役であった王宮魔術師は新たに、女王の狂わせる程度を管理するという任を任せられるようになった。

まず、生まれて間もない赤子に母の乳を与えない。その後も決して親の愛情を与えない。自分が女王という機関だということを認識させるためだ。

そして、立つことを覚えれば最初で最後の玩具、女王の人生の登場人物を模した人形を与える。

言葉を覚えれば女王としての徹底的な教育が始まった。

朝から夜までその教育は続き、教師である魔術師の問いを間違えれば暗室で一晩折檻された。悲鳴すら響かぬ闇でただ鞭打たれ続けた。それを毎日、繰り返す。何度も、何度も、何度も。

憔悴した表情を面会した貴族共に見られることは、これから女王になる人形にはあってはならぬと魔術師は人形の顔に魔術的処置をかけた。

それを幾度繰り返すごとに、未来の女王はより人形らしくその表情

を失っていった。

王家の血は濃さによる美しい相貌に表情がないことは、民には神々しさを感じさせ、議員たちには一種の畏怖感を与えた。

それを何代も繰り返し、試行錯誤し、そして当代の女王は誕生した。ここ数代の中でもかなりの完成度だろう。

決して王宮魔術師に抗わず、必ずその意見と騎士団長の意見を照らし合わせ判断する。

王宮魔術師がその暗示を解かなければ決して狼狽えず、狂気の片鱗すら見せず。

完璧な、国のための完璧な人形がそこにあった。

数分経つても女王の人形遊びは終わらなかった。

レドウスは元々女王の教育には携わっていなかったせいで、その管理法に慣れていないせいだろう。

これでは埒があかん。しかしこの機を逃すのは拙い。実際どう

であれ騎士団は事実上エルル力を捕まえていない。先んじてより規模の大きな事件を我々が終結させれば

女王と騎士団の連中の地位に楔を打ち込める。何より、寧猛な魔物の類が召喚されていれば民に被害が及ぶ

グスタフはレドウスに眼を向け合図を送った。

青白い顔の男は、本気ですか、という表情を返す。

時間が、無い。この情報を掴んでいるのは私だけでは無いはずだ。確実に騎士団も動き出す。それより先に動かねば。

彼には珍しい焦りだった。齢のせいか増えた皺は、苦渋を湛えている。

「レドウス殿」

「……はい、なんでしょうか元帥閣下」

「やれ」

レドウスは静かに頷くとおもむろに懷から短剣を取り出すとそれを自らの腕に刺した。

俄に溢れる血潮。それは彼の手を伝いポタポタと白い大理石の床を朱に染める。

「影の小人は、宵の淵に軒先で踊る。花壇の花を皿に、家主の血を酒に。

有象無象を記す影の小人は、決して踊らず。花壇の花は枯れ、家主はただ乾涸びる。

真理を述べし影の小人は、明けの明星に、歌を歌う。その声は滔々と草木を覆い、また宵の淵」

長い呪文。ゆっくりと、歌うように呪文をレドウスは唱えた。

女王の額に次第に魔方陣が浮かび上がる。

はつとして女王は抱えていた人形を床に落とした。

「いや、レドウス、やめて。暗いのは嫌、暗いのは嫌なの、お願い、やめて」

「陛下、ご安心を。暫しの間お休みになるだけです。どうか落ち着きください」

そつと女王の髪を優しく梳く。その顔からレドウスの心は何も見えない。

女王はそれで安心したのか、レドウスにしがみつくようにした。

「我が血は影。影は現身」

レドウスの流れでた血が燭台の影を喰らい、次第に人の形になってゆく。

まるで獲物を食い散らかす獣のように血は影を無造作に喰ってゆく。その度に血は頭を造り、胸を造り、腕を造り、人の形になる。

それは女王の姿だ。黒い影の粘土でできた女王がそこに産まれた。

「さあ、入りなさい」

そつと影に声をかけると、影はズルズルと女王の鼻から口から入り込んだ。

人形に、人形が入るのか。

グスタフは無感動な瞳でそれを眺めていた。

「レドウス、その術はどれだけ保つ？」

「当初の予定より早いものでしたから、一晩も持たないでしょう。恐らくは夜明けには解けます」

「それだけあれば充分だ」

「珍しく、お焦りなのですね」

レドウスは非難の込もった眼差しをグスタフに向ける。

珍しい、この男も感情的になることがあるのか、とグスタフはいつにないレドウスの様子に驚いた。

「金で女王を裏切った貴様が、今度は今更女王に情が移ったとでも？ 移ろい易いのだな」

「そつかも、知れません」

顔を伏せレドウスは呟く。しかし再び顔を上げた彼の瞳は、また何も映さないものになっていた。

「国軍の出動許可の書類、それだけで構わないですか？」

「無論、昨晚の界魔術の痕跡に対する調査についても文言を加えておけ。それとフラニールの使用許可もだ。ヤツの使い魔は厄介だ」

「あの魔女が、自分の作ったものの対策を取っていない、とでも？」

「お前は知らないだろうが、あの女はそいつとイネレアを作ったことを酷く後悔している。間違いなく対策は取っているだろう」

「ならば」

「だが考えてみる。今は道中だ。ヤツの根城ならともかく、魔術兵器の妨害用の武装などしているはずがない。アイツは肝心な所で詰めが甘いヤツだからな」

「……随分とお詳しいんですね」

「ふん、12年前の戦で、少しばかりな。時間が無いのだ。私自ら兵を出し追跡する。後は任せた」

レドウスの返事を待たずに女王の方を見遣ると、彼女は枯れた花のように呆然と宙の一点を見つめている。

「陛下」

「う、あ、よ、善きに、計らえ」

「はっ」

どうせ今までも人形だったのだ、何も変わらない。

そう言い聞かすようにグスタフは勢い良く立ち上がり出口に進んでいった。

「レドウス殿」

女王とレドウスしかない部屋に男の声が響く。

「解除」

レドウスが短い呪文を言い終わるとその男は部屋の隅の影から姿を表した。

「予定通り、ということですね」

「そのようだ。もう少ししたら私も出よう」

「期待していますよ。何せあなたは英雄となるんだ。報奨もかなり弾むでしょう」

男は肩を竦めて酷薄な笑みを浮かべた。

「そんなもの、興味は無い。私はただ」

レドウスは首を振る。

この男はそんなことすら、気がついていないのか。

「いや、何でも無い。それで騎士団長に報告は？」

「グスタフが戦闘を始める頃に連絡に行きましょう」

「全て、お前の掌の上というわけか」

「さて、そうなると思いますが」

「フン」

レドウスは男の目から顔を背けるように自らの精神を沈み込ませた女を見つめた。

細く嫋やかな指は、操り人形になってなおレドウスの服の裾を掴んで離さない。

「しかし、借体法まで修めておられるとは、さすが王宮魔術師といったところですか」

「……貴様と話すことはもう無い。やることはまだ他にあるのだから。騎士団副団長ヒューム殿」

「ふ、そうですね。それでは失礼します」

ヒュームは愉快そうに鼻で笑った後、玉座の裏にある扉から出て行った。

「もう少しだ、もう少し、もう少しで」

レドウスは左耳のピアスにそっと触れた。

白の国に相応しい純白の大理石の床には、愛でる人を失った人形が、ぽつりと転がっていた。

グスタフが国軍の総本部についたのは夜も大分深けた頃合いだった。門扉の前では忙しく伝達の兵が走り回っている。

「か、閣下……！ さ、先ほどの界魔術……！！」

慌てて転びそうになりながら走ってくる若き女将官。

「落ち着かんか。そんなだから貴様には細事を任せられんと言っているのだ」

いきなり憧れの元帥に叱りつけられ女将官はその首を悄気させた。

「陛下から許可が降りた。至急兵を500ほど編成せよ。それとフラニールも出せ」

「へ、陛下から許可が？ あ、いえ、しかしフラニールとは」

「あれは契約回路を乱せる。もしも今回の界魔術で召喚者がいるとすれば、持つて行って損はないだろう。それに件の魔女についても調査の許可を頂けた」

「ならば、精霊ファイレも……」

「ああ、場合によっては交戦となるだろう。だがフラニールがあればヤツも役立たずだ」

「了解しました。至急準備します。　　そ、それで、閣下、どうか私も」

愚直な青い瞳が真っ直ぐにグスタフを見つめる。

「足手まといはいらん。相手はどちらだろうが化け物には変わりない。失敗は許されんのだ」

「……失礼しました」

女将官は分かりやすく肩を落とした。

確か、こいつはまだ20を越えて幾許かだったはずだ。家が没落した貴族で、何とか功を挙げたいのだろう。

軍人となるより花を愛でいた方が似合うその姿を見てグスタフはいつになく親心を出す気になった。

「お前はまだ若い。これから、功を挙げる場など幾らでもある。焦るな、研鑽しその刃を研いでおけ」

「！はい！」

深々と礼をすると女将官は頬を染めて走り去って行った。

いつになく、優しいことだ。

グスタフは苦笑いする。

緊張、しているのか。確かに失敗は許されん。今夜、全てを決さねば、この国の未来は無いのだ。

「私の甲冑を持て！」

思考を断ち切るように大声で近場にいる兵に命令を出す。突然の命令に飛び上がるほど驚いた若い兵士は返事もそぞろに駆けていった。

およそ1時間後、用意の出来た騎兵500の戦闘に立ち、グスタフは夜の闇に消えた。

レイアル家の証たる竜のペンダントは深い闇の中、揺れて鈍く光っていた。

城塞將軍と女王の懷刀？（後書き）

泉「でばん……」

「ご意見」感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2770ba/>

君の物語

2012年1月13日22時47分発行